石見銀山遺跡石造物調査報告書 7

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

― 温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）―

平成19（2007）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

西　念　寺

西念寺側から港側を望む

序

島根県教育委員会では、平成８年度から大田市（旧　温泉津町、仁摩町を含む）とともに、石見銀山遺跡の解明を目的とした発掘調査・文献調査・科学調査などを含む総合調査を実施しています。

これまでの調査により、16世紀に石見銀山で産出された銀が、日本のみならず東アジアの政治・経済に大きな影響を与え、東アジアとヨーロッパとの文化的交流にも大きく貢献したことが次第に明らかとなってきました。

平成17年１月には日本国政府から国連教育科学文化機構の世界遺産センターへ石見銀山遺跡の世界遺産登録推薦書が正式に提出され、平成19年度に開催される世界遺産委員会において世界遺産としての登録の可否が審議される見込となり、ますます注目を集める遺跡となってきています。

本書は現在も継続して実施されている総合調査のうち、平成18年度に実施した石造物調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、江戸時代初期から近代までの石造物が確認され、温泉津地区における石造物のあり方を知る上での新たな資料を得ることができました。

この調査に際しまして、ご協力いただきました西念寺および地元の方々など関係者のみなさまに心からお礼申し上げるとともに、本書が今後の調査研究及び整備活用等の基礎的な資料として活用されれば幸いに存じます。

平成19年３月

島根県教育委員会

教育長　藤　原　義　光

例　　言

1．本書は石見銀山遺跡総合調査の一環として、平成18年度に実施した石造物分布調査及び悉皆調査の報告書である。

調査した場所

（悉皆調査）

①西念寺

（分布調査）

①温泉津地区

2．調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査整備委員会（平成19年３月現在）

田中　　琢（元奈良国立文化財研究所所長）
青柳　正規（国立西洋美術館館長）
牛川　喜幸（元京都橘大学教授）
勝部　　昭（元島根県教育委員会教育次長）
斉藤　英俊（筑波大学大学院教授）
佐伯　祐治（同和鉱業(株)取締役）
高橋美也子（(財)大田市体育・公園・文化事業団理事）
田中　圭一（元筑波大学教授）
田中　義昭（元島根大学教授）
藤岡　大拙（ＮＰＯ法人出雲学研究所理事長　荒神谷博物館館長）
村上　　隆（奈良文化財研究所都城発掘調査部上席研究員）
小林　准士（島根大学法文学部助教授）
竹腰　創一（島根県大田市長）

事務局（平成18年度）

野村　純一（教育庁参事）
山根　正巳（文化財課長）
和田　謙一（文化財課世界遺産登録推進室長）
足立　克己（同主幹）
佐々木慎二（同主幹）
和田　守弘（同主任）
太田　俊介（同主任）
中木沙友美（同嘱託）
黒崎　寿政（同文化財ＧＬ）
林原　幹治（同室企画幹）
大矢根久和（同主幹）
引野　佳幸（同企画員）
目次　謙一（同文化財保護主任）
田原　淳史（同文化財保護主任）

石造物調査指導者

田中　義昭（島根県文化財保護審議会委員）
池上　　悟（立正大学文学部教授）

宮本　徳昭（石造物調査員）

調査参加者（所属は調査当時）

現地調査

（石造物調査指導者）　田中　義昭　　池上　　悟　　宮本　徳昭

（島根県教育委員会）　田原　淳史

（大田市教育委員会）　中田　健一（石見銀山課主任技師）

新川　　隆（同調査補助員）

尾村　　勝（同調査補助員）

松尾　賢二（同調査補助員）

湯川　　登（同調査補助員）

（立正大学考古学研究室）　安井千栄子　松田　慎二

報告書作成　現地調査員

3．調査においては下記の方々から多くのご教示・ご指導を頂いた。記して謝意を表したい。

鳥谷芳雄（古代文化センター主幹）　西念寺住職

4．実測図・写真・拓本等は島根県教育委員会・大田市教育委員会において保管している。なお、デジタルデータについては大田市教育委員会において保管している。

5．本書の執筆は目次に明記した。

本　文　目　次

第１章　調査の目的・方法・経緯…… 1

第２章　石見銀山遺跡と温泉津の歴史……（新川） 3

第３章　平成18年度調査の概要…… 5

第１節　調査の経過……（田原） 5

第２節　分布調査の概要……（新川） 5

第３節　悉皆調査の概要……（田原） 8

第４章　西念寺墓地の調査…… 11

第１節　西念寺の概要……（長嶺） 11

第２節　西念寺墓地の調査……（池上） 13

第５章　総括……（田中） 29

挿　図　目　次

第１図　墓石及び石造物の形式
第２図　石見銀山と温泉津の位置関係…… 4
第３図　温泉津地区石造物分布図（Ｓ＝１／2000）…… 10
第４図　西念寺境内配置図…… 11
第５図　西念寺周辺地形測量図・墓地配置図（Ｓ＝／1000）…… 12
第６図　西念寺墓地平面図（１）（Ｓ＝１／100）…… 13
第７図　１号窟石造物実測図（Ｓ＝１／10）…… 14
第８図　２号窟実測図（Ｓ＝１／40）…… 16
第９図　２号窟石造物実測図（１）（Ｓ＝１／10）…… 17
第10図　２号窟石造物実測図（２）（Ｓ＝１／10）…… 18
第11図　２号窟石造物実測図（３）（Ｓ＝１／10）…… 19
第12図　２号窟石造物実測図（４）（Ｓ＝１／10）…… 20
第13図　３号窟実測図（Ｓ＝１／40）…… 21
第14図　３号窟石造物実測図（１）（Ｓ＝１／10）…… 22
第15図　３号窟石造物実測図（２）（Ｓ＝１／10）…… 23
第16図　３号窟石造物実測図（３）（Ｓ＝１／３）…… 24
第17図　伝松浦家墓所平面図（Ｓ＝１／40）…… 26
第18図　伝松浦家墓所石造物実測図（Ｓ＝１／20）…… 27

表　目　次

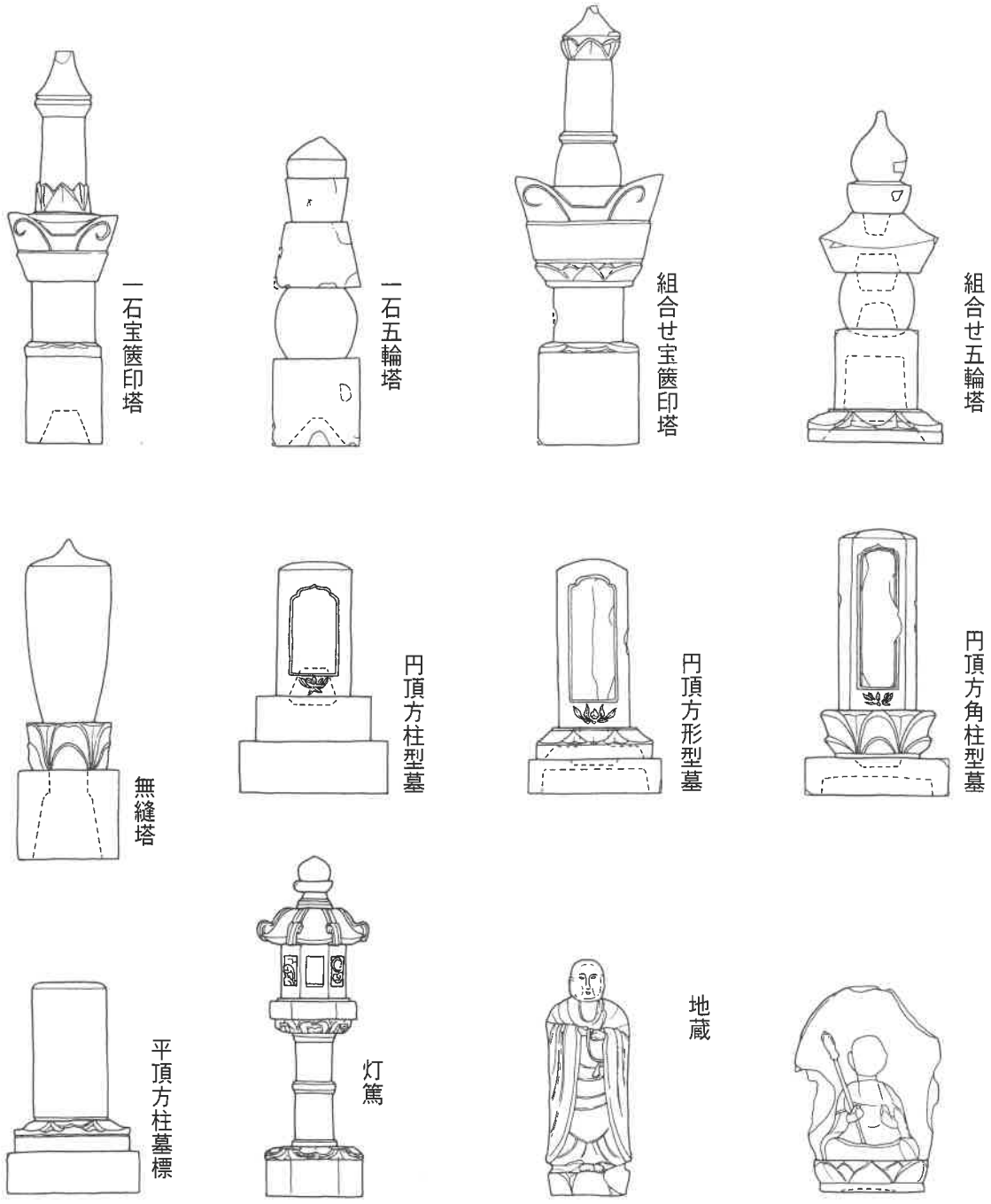
第１表　温泉津地区石造物分布調査の結果…… 9
第２表　墓石銘文一覧表 …… 31～34

写真図版目次

図版１　西楽寺墓地・西念寺墓地
図版２　西念寺墓地・西念寺墓地
図版３　金剛院墓地・龍澤寺墓地
図版４　龍澤寺墓地・極楽寺墓地
図版５　温泉津地区石造物（１）
図版６　温泉津地区石造物（２）
図版７　温泉津地区石造物（３）
図版８　西念寺１号窟
図版９　西念寺２号窟（１）
図版10　西念寺２号窟（２）
図版11　西念寺２号窟（３）
図版12　西念寺３号窟（１）
図版13　西念寺３号窟（２）
図版14　西念寺３号窟（３）
　　西念寺４号窟（伝松浦家墓所）
図版15　西念寺４号窟（伝松浦家墓所）

凡　例

・西念寺に存在する石造物のうち、墓地番号３・５所在の石窟内石造物及び伝松浦家墓所のものを掲載した。
・各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅をcm単位で記載したが、欠損している場合は残存している規模を現存高または各部材毎の高さで記載した。
・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不能部分及び文字の存在が推定される部分は［　　］で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は、　］（上欠）、［　（下欠）と示した。また推定できる文字は□内に入れて表示した。
・名字の部分は○○○とした。
・掲載していない石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。
・写真図版の個別番号は一覧表の番号に対応する。
・挿図の個別番号及び写真図版の個別番号と一覧表の番号は対応する。



第１図　墓石及び石造物の形式

第1章　調査の目的・方法・経緯

1．調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世)、さらには近代へと長期に亘って形成された遺跡である。石見銀山遺跡では鉱山の開発から閉山にいたるまでに、繁栄期・停滞期・衰退期のあったことがおおよそ明らかになっているが、その歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、上記のような銀山の変遷を具体的に解明することにあり、

①人口の推移

②活動エリアの消長及び人の動き

③社会構造の把握

を具体的な目的として調査を実施するものである。

しかし、石造物といっても多種多様なものがあるので、仮に

①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物

②石臼や要石などの生産関連石造物

③街道沿いの道標などの交通関連石造物

④石切り場など生産地・流通関連石造物

に分類している。

中でも①の信仰関連石造物には、鉱山の盛衰（人口の増減等）がより直接的に反映されていると考えられる。その理由は、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石は、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料と考えられるからである。

したがって、墓地の石造物、とりわけ墓石について重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとした。

2．石造物（墓石）調査の経緯と方法

石造物(墓石)調査は島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和59～61年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に、確認調査を実施したことがその端緒と言えよう。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類あるいは消長のアウトラインを押えるため、紀年銘がある墓石の調査を重点的に進め、後年の本格的調査に備えることとした。さらに、墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るための分布調査。

②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するための詳細な悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料についての関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、

①銀山地区・大森地区に位置する

②群としてのまとまりが明確に把握できる

③アクセスが容易である
④調査環境が比較的よい
という条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。

この地区における調査は平成15年に一区切りするに至り、それを受けて平成17年度からは周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなった。

3．温泉津地区における石造物調査

温泉津地区及びその周辺においては、これまでにいくつかの石造物調査が行われている。

平成9・10年度に行われた温泉津伝統的建造物群保存対策調査では、松井乃生と多田房明が地区内の石造物の分布を調査し、その概要について紹介した。平成14・15年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として港湾調査が実施され、その中で沖泊地区及びそれに至る街道脇の石造物の概要が明らかにされた。平成17年度には温泉津地区で始めての悉皆調査が恵洸寺において実施された。この調査では、同寺に存在する特徴的な廟式墓地を始め主に古相の墓石類の調査がなされ温泉津地区における墓所の一側面を明らかにする貴重な資料を得ている。

ただ、以上のほかは個人単位での研究事例がいくつか知られている以外、全体的に調査研究例は多くなく、今後の更なる調査研究が求められる地区であるといえよう。

（註）

1　島根県教育委員会・島根県文化財愛護協『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』1987
2　島根県教育委員会　他「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊 1999年
3　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書1―妙正寺―』2001
4　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書2―龍昌寺跡―』2002
5　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書3―安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』2003
6　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書4―長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家―』2004
7　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書5―分布調査と墓石調査の成果―』2005
8　島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡石造物調査報告書6―温泉津地区恵珖寺墓地―』2006
9　温泉津町教育委員会『温泉津―伝統的建造物群保存対策調査報告書―』1999
10　島根県教育委員会『石見銀山街道―鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』2004
11　伊藤菊之輔『石見の石造美術』1968
12　石村勝郎「福光石彫刻の遠祖菅谷九郎右衛門」『石見銀山　戦国の記』1997

第2章　石見銀山遺跡と温泉津の歴史

石見銀山の歴史は延慶2(1309)年の大内氏による発見後、大永6(1526)年の神屋寿禎による再発見からとされているが、温泉津の成立時期については明らかとなっていない。

「温泉」の地名は平安時代の『和名類聚抄』にすでに「温泉郷」の文字が見え、温泉津や温里を含む一帯が比定されている。その後、温泉郷は沖泊にある櫛島の櫛山城を拠点とする温泉氏により支配されたとされるが、その実態については明確ではない。

銀山開発初期の銀積み出し港は、仁摩の鞆ヶ浦、古柳などとされ、当初は温泉津は主要港ではなかったと言われている。しかし、温泉津沖泊に所在する恵比須神社は16世紀代に遡る古建築であることが明らかとなり、建立が、大永6(1526)年と伝えられることからも、銀山開発初期段階ではすでに港湾施設として機能していたことが指摘されている。

温泉津が港湾施設として資料等で確認できるのは、毛利氏が石見に進出し、石見支配の拠点の一つとしてからと言われる。

具体的には永禄4(1561)年、毛利元就が石見銀山の攻防及び、尼子氏攻略のため温泉津に吉川元春を進駐させ、銀山への兵糧運搬の準備をさせたことに始まり、次の年には石見銀山を完全掌握している。その後、銀山地内と温泉津には奉行人が配置されており、温泉津の沖泊にはさらに永禄13(1570)年頃に鵜丸城を築城している。毛利氏は、温泉津・沖泊の港湾機能の高さを重視し、温泉津・沖泊を一体的に整備しており、湾の入り口には鵜丸城の他に櫛山城、笹山城を配し、防御を固めている。

毛利氏による支配は、豊臣氏との銀山共同管理時期を含め慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いまで続き、この間、銀の積み出し港、物資の搬入搬出の主要港として港湾施設としての基礎が整備されている。さらに軍事的・政治的拠点としての機能も強化され、毛利氏の重要拠点の一つとして港湾都市へと発展している。これと共に、銀山から降路坂を越え、西田を経て温泉津・沖泊へ至るいわゆる温泉津沖泊道も整備され、銀山への物資の大量輸送が温泉津を中継基地として行われるようになる。

関ヶ原の戦い以後はいち早く徳川氏の直轄地となり、11月には徳川氏の代官頭である大久保長安が石見に着任し、翌慶長6(1601)年に初代銀山奉行となっている。この大久保長安によっても、温泉津は重要拠点と位置付けられ、本格的な整備が進められる。銀の搬出こそ海上輸送の危険性から慶長9(1604)年には尾道まで陸送されるルートに変更されるが、その後も温泉津は銀山の物資の搬入・搬出港として重要な位置を占めており、慶長10(1605)年には、銀山と共に「地銭免除」の特権が与えられ、町場作りに一層力が入れられている。その結果、温泉津の居住者も増大し、すでに毛利氏の支配下で出現していた問屋の数も増え、大消費地である銀山の外港として更なる発展をとげることとなる。実際慶長10(1605)年からの1年間だけで、益田・三隅から運ばれた灰吹き用の木炭の陸揚げが、14,000表にものぼっている。こうした物資は温泉津から温泉津沖泊道を通って、牛馬で銀山まで運搬されている。

銀山の最盛期は慶長年間から寛永年間と言われ、この時期の産銀は年産40トンを超えている。その後産銀量の低下に伴い、銀山が徐々に衰退していくのとは異なり、温泉津では寛文12(1672)年以降、日本海西廻り航路の開拓・展開により、その寄港地となり、さらに北前船の出現と活躍によって、日本海航路の重要な寄港地としても急速に整備されていくことになる。町には北前船の物資を扱う問屋や商家が立ち並び、延享2(1745)年には狭い温泉津の町中に40軒の問屋を数えるまでに

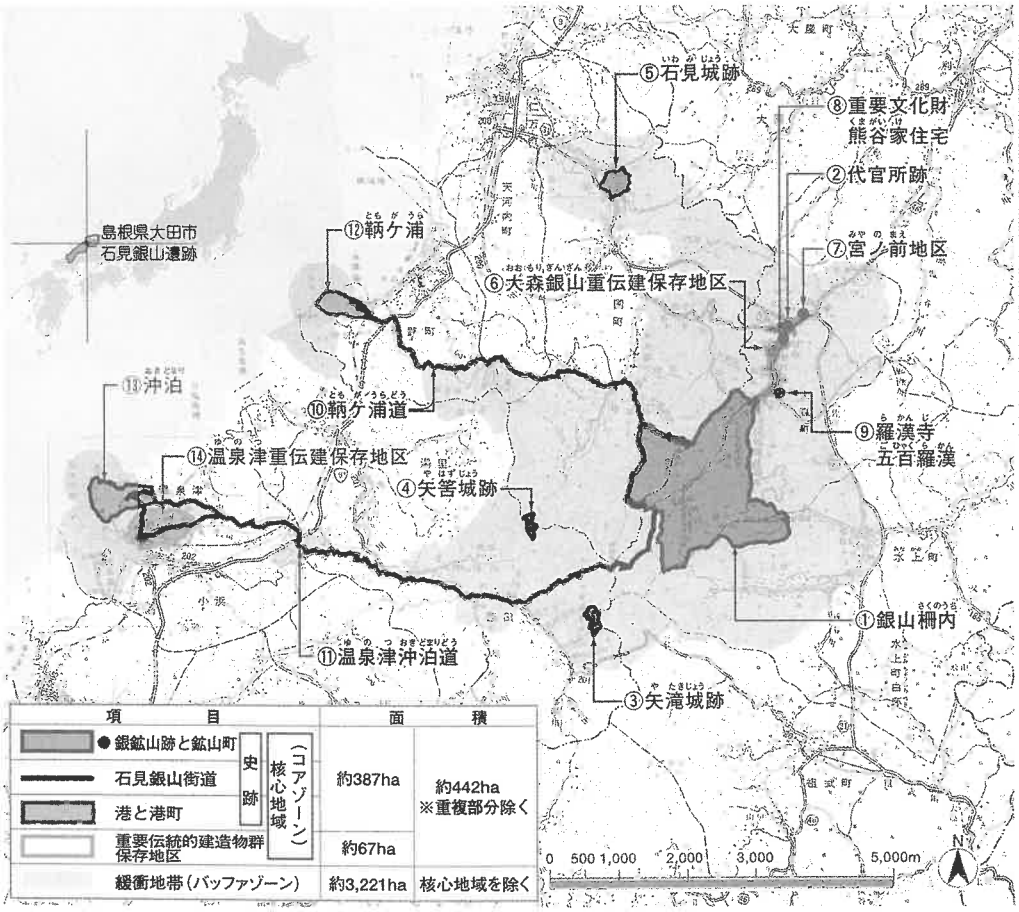
なっている。それぞれの問屋は取り扱う廻船が定められており「加賀屋」「越前屋」「越後屋」「丹後屋」など廻船の本拠地の国名を屋号とする問屋も多かった。しかし、問屋の数が増え、各問屋間の競争が激化すると、「抜け駆け」事件も起こるようになる。これらに対して船表番所からの申し渡しが出されるなど、問屋仲間の取り締まりも強化されることとなった。

このように廻船が増加し、物流が活発になると、この流通システムに組み込まれる地場産業も開発され、展開していく。温泉津では「温泉津丸物」と呼ばれる陶器生産が始まり、「はんど」という甕を主要製品とした日用雑器が商品として北前船ルートにのって19世紀中頃から大量に流通する。これらの日用雑器は「石見焼」とも言われ遠方まで運ばれたが、当然地元の銀山にも搬入されており、銀山を発掘調査すると近世から近代の層でこの石見焼が数多く出土している。温泉津の特産品はこの他に瓦、福光石、石見半紙などが知られ、これらも北前船の寄港によって広く買積されていく。

このように、活況を呈した温泉津であるが、明治維新となり、近代化が進み、船も西洋式船舶の導入、鉄道の敷設など、流通にも近代化が訪れると、従来の北前船は衰退していく。温泉津の問屋も従来の問屋業が成り立たなくなり、このため一時40軒を数えた廻船問屋も小売業や旅館業に事業形態を変えるなど、急速に姿を消してゆくことになる。そして明治以降、温泉津の町は新たな展開へと移行してゆくのである。

参考文献

「温泉津町誌」上巻・中巻　温泉津町
「石見銀山街道　鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書」
島根県教育委員会



第２図　石見銀山と温泉津の位置関係

第３章　平成18年度調査の概要

第１節　調査の経過

平成18年度の石造物調査については、石造物検討会及び石造物調査部会を開催し、石造物調査員をはじめとした調査担当者で、調査箇所の選定及び調査期間・調査方法について検討を行った後、現地での調査を実施した。

具体的な経過は以下のとおりである。

・５月15日：石造物検討会
（石見銀山発掘調査事務所）

平成17年度の石造物調査及びこれまでに実施された沖泊道脇の石造物分布調査の概要確認と、今年度調査のおよその方向性について検討。

この検討会の中で温泉津地区については分布調査がまだ実施されておらず、早い時期に実施する必要があることを確認。

・６月14日～16日：温泉津地区石造物分布調査
（温泉津）

石造物検討会での検討を受け、温泉津地区の分布調査を実施。調査は主に温泉街と温泉街を挟んで存在する丘陵を対象とし、その結果約30箇所で石造物の存在を確認。

・８月21日：石造物調査部会
（温泉津コミュニティーセンター）

温泉津地区分布調査の結果を受けて、今年度の悉皆調査場所の選定、調査時期及び調査期間、調査方法の検討を行う。検討の結果、10月後半～11月上旬に３日間、西念寺墓地の悉皆調査を実施すること、及び銀山地区のうち資料化の進んでいなかった安原伝兵衛関連の石造物の資料化を進めていくことを確認。

・10月31日～11月２日：悉皆調査（西念寺）

石造物調査部会での方針を受け西念寺の悉皆調査を実施。調査期間及び調査員が限られているため、今年度は墓地のうち東側の墓地について実施し、残りの部分については次年度以降に行うことを確認。

・２月７日：調査部会（大田市役所）

調査報告書の作成状況と、安原備中関連石造物調査についての方針を確認。

第２節　分布調査の概要

温泉津地区は、周囲を70～80mの低丘陵に囲まれ、町並みは東西に延びて温泉津港に開ける谷と、この谷に向かって南北に交わる数本の支谷に形成されている。これらの支谷にはそれぞれ寺院が造立され、現在五カ寺が存続している。銀山街道は東西に延びる谷の中央を貫通するものと、西念寺脇から沖泊へ通じる沖泊往還と呼ばれる道が確認されており、この他南北に交わる谷筋にも道が延びている。

今回の分布調査では温泉津地区の他一部小浜地区の調査も実施しており、分布状況は第３図に示している。石造物は主に墓石を中心に地区内の広範囲に分布しているが、かならずしも一様に存在しているわけではなく、立地条件などにより大きくＡ～Ｃの３タイプに分類できる。

Ａは、地区内に造立された寺院に伴い、その寺域内と考えられる谷の縁辺部から丘陵斜面に立地するもので、番号１～９・11・26・27などが該当する。

Ｂは、地区内を通る道路(街道)の脇に造られたもので、特に沖泊往還沿いに集中的に見られる。番号では12～16・20・28～32・34・35などが該当し、墓石以外に地蔵などの石造物も見られる。

Ｃは、周囲の丘陵の尾根上に立地し、寺院との関係を明確にするのが困難なもので、10・17～19・21～25などが該当する。しかし、麓の寺院と全く乖離したものではなく、いずれかの寺院と関連を有していたことが想定される。

また、今回分布調査した石造物は墓地として形成されているものが主体を占めているが、街道沿

いには12・16・29・34など地蔵や小祠も存在しており、石造物の形態・構成内容によってもある程度の分類が可能である。

つぎに各石造物を概観する。

1．恵珙寺墓地　町並み中央付近の街道南側に所在し、墓地は本堂裏の谷に形成されている。温泉津地区では唯一廟式墓地が造られている寺院として知られ、石造物は墓標系を中心に388基が確認されている。詳細については、すでに悉皆調査が行われており、報告書が平成17年度に刊行されている。

2．西楽寺墓地　恵珙寺の西側に隣接し、墓地も恵珙寺同様本堂裏側の小谷筋に形成されている。墓域は南北約50m、東西20mの範囲に広がっており、石造物は墓標系の角塔を中心に約250基を確認している。

3・4・5．西念寺墓地　温泉津地区内を南北に走る支谷のうち海に最も近い谷の奥に形成されている。西念寺に関連すると考えられる墓地は数ヶ所に分散しており、今回は3地区に分けて報告する。このうち本堂の南西側の墓地(3)は主に一般の集団墓地と考えられるが、本堂の南西には組合せ宝篋印塔が9基並んで立てられている一角がある。南北70m、東西30mの墓域に角塔159基、組合せ宝篋印塔9基、組合せ五輪塔3基、石仏21基を確認している。(4)は西念寺とは沖泊往還を挟んで東側の岩盤を削って墓域を形成しており、南北約20m、東西約3mの範囲に岩窟3基を掘り込んでいる。石造物の詳細については次章で述べている。(5)は、西念寺から沖泊往還を少し上った東側に所在し、大きく2段の区画で構成されており、下段を(5-1)、上段を(5-2)とする。(5-1)は斜面を削り取って南北25m、東西5m程の平坦面を形成しており、松浦家の墓所と伝えられる。南側には石窟が2基掘り込まれ、南側の内部には板碑2基、組合せ宝篋印塔3基が確認でき、次章で詳細を報告している。北側の岩窟には位牌型の角塔が3基できる。岩窟前面や北側の平坦地にも墓石が散在しており、一石五輪塔4基、組合せ宝篋印塔1基、角塔13基、無縫塔1基が確認できる。角塔の中には六角柱型も1基含まれる。(5-2)はさらに2段から形成されており、上段は石窟内に石仏12基と角塔4基が、下段には角塔4基、組合せ宝篋印塔1基が確認できる。したがって(5-1)・(5-2)を合わせた石造物の総数は、組合せ宝篋印塔5基、一石五輪塔4基、角塔24基、無縫塔1基、板碑2基、石仏12基の48基である。

6．金剛院墓地　西念寺の所在する谷の東側の谷奥に形成されており、墓域は本堂裏の南北約60m、約東西30m程の範囲に広がる。丸みを帯びた角塔に笠の付く特殊な形態の角塔も見られる。石造物総数は一石五輪塔3基、組合せ宝篋印塔1基、組合せ五輪塔2基、角塔（笠付も含む）45基、無縫塔8基、石仏6基の65基である。

7・8．龍澤寺墓地　町並みの東側に位置し、海から数えて4本目の支谷に形成されている。寺域は谷の中ほどに当り、墓地は本堂南側(7)と東側丘陵斜面(8)に形成されており、墓域は(7)が南北5m、東西10m、(8)が南北55m、東西25m程である。(7)は住職代々の墓地と考えられ、無縫塔9基、石仏10基を確認している。(8)は一般の集団墓地で、角塔約180基の他、石仏5基、灯篭5基を確認している。

9．極楽寺墓地　小浜地区の町並み中央西よりの位置から北に延びる谷及び、その東側丘陵南面に形成されている墓地で、本堂東から北側に展開しているものと東側の尾根上に展開するものとに分かれる。墓域はそれぞれ南北90m、東西30mと南北60m、東西35m程で、本堂の南東には古い墓石が寄せ墓となっている。石造物は一石宝篋印塔8基、一石五輪塔9基、組合せ宝篋印塔14基、組合せ五輪塔5基、角塔約570基、無縫塔28基、石仏44基の678基を確認している。

10．墓地　温泉津町並みの南側丘陵上に立地し、恵珙寺、西楽寺、極楽寺の中間地点に所在する。墓域は南北300m、東西200m程の範囲に広がるが、

墓域機内で３箇所程度の墓石のまとまりが見られる。石造物は角塔を中心に約65基程度確認しているが、組合せ宝篋印塔１基や、陶器製の墓も１基見られ、石仏も１基確認している。

11. 延命院　極楽寺から西に100m程の道沿いに所在する。寺院に付随する墓地は確認できず、境内内で組合せ宝篋印塔１基と石仏５基を確認したのみである。

12. 石仏　延命院からさらに150m程西の車道沿いに所在する。小祠の中に石仏２基が収まる。

13・14・15. 石造物　西念寺の存在する谷と金剛院の存在する谷に挟まれた丘陵先端部に位置し、愛宕神社へ上る山道沿いに所在する。(13)は石仏６基、(14)は組合せ宝篋印塔と角塔が１基ずつ組み違えられた状態で安置されている。(15)は組合せ五輪塔があり、大久保長安の逆修塔を再々建したものと伝えられるが、すでに組み違えられているようである。

16. 石仏　町並み西端の海岸沿いの道路脇に形成された石造物群である。南面する岸壁の約30m間に掘られた３基の岩窟内に30基の石仏が納められている。

17. 墓地　西念寺の西側丘陵上に形成されており、南北10m、東西15m程の墓域に角塔約40基が確認できる。墓石には花崗岩製の墓が１基含まれる。

18. 石造物　西念寺北側の沖泊往還から西に延びる山道沿いの尾根上に所在する。小祠に安置された石仏の横に組合せ宝篋印塔の塔身が散在している。

19. 墓地　(18)の石造物から北東方向に約40mの尾根上に形成されており、南北15m、東西10m程の墓域に角塔約10基が散乱している。

20. 墓地　西念寺から北に延びる沖泊往還沿いに形成されており、金剛院側から延びる道との合流点のすぐ北側に当たる。墓域は、南北30m、東西20m程の範囲に広がり、水溜め(くり込み穴)を挟んで往還沿いに２段で構成されている。下段は南北10m、東西３mの平坦地に一石宝篋印塔１基、組合せ宝篋印塔笠部２基、無縫塔１基、角塔５基を確認しており、道の合流地点には花崗岩製の尖頭方形墓石が安置してある。上段は方形に岩盤を加工して10m×３m程の平坦面を造成し、壁面に小岩窟を掘り込み中に地蔵台が残る。墓石等は残っていない。

21. 墓地　往還から金剛院へ向かう道から丘陵を北側に上った尾根上に立地し、斜面を削って平坦地を形成している。墓域は東西、南北とも10m程度で、中心となる墓石には石柱で囲いが設けてある。石造物は角塔を中心に12基を確認している。中心の墓石には「岩谷妻○○」の銘がある。

22. 墓地　21からさらに北に上った丘陵頂部に立地し、斜面を削った数段の平坦地に形成されている。墓域は南北50m、東西25m程の範囲に広がり、西側平坦地には瓦が散乱し、建物が存在していたことが伺われる。石造物は一石五輪塔２基、組合せ宝篋印塔10基、角塔45基を確認しており、天正２年銘の地輪も確認している。

23. 墓地　金剛院東側の丘陵尾根上に立地し、墓域は南北10m、東西５m程度である。石造物は総数で、角塔８基を確認している。

24. 墓地　23から北に約150mの丘陵尾根頂部に立地し、墓地部分は周囲を削り取られ一段高くなっている。墓域は南北30m、東西15m程度で、石造物総数は角塔を29基確認している。

25. 墓地　24から北東に約60mの丘陵東斜面に所在する。石造物は組合せ五輪塔１基、角塔２基を確認している。

26・27. 海蔵寺跡墓地　町並みの中央付近から北に延びる支谷の中ほどに所在する。墓地は旧本堂跡地の西側に形成されており、道を隔てた東側にも石造物が存在する。西側(26)の墓域は南北10m、東西５m程で、石造物は、組合せ五輪塔１基、角塔20基、石仏１基を確認している。東側(27)では、角塔３基、石仏６基の他、陶器製の墓標を１基確認した。

28. 墓地　町並み東部で銀山街道北側の丘陵南麓

に所在する。墓地は町並みから階段を上った一段高い面に形成されている。墓域は南北15m、東西15m程で、背後の丘陵を削って墓域を整備している。石造物は、組合せ宝篋印塔１基、角塔60基を確認しており、墓石をコンクリートで覆うなど最近まで補修の手が加えられている。

29. 石仏　(28)の約50m東で、銀山街道と日祖への道との交差点東の丘陵裾部に立地する。石造物は丘陵斜面に点在し、４基の小祠内に石仏５基および、井戸顕彰碑を１基確認した。

30. 墓地　沖泊往還沿いの丘陵頂部付近に立地し、往還のすぐ東側に所在する。墓域は南北25m、東西15m程に広がり、墓石はかなり集中的に配されている。石造物は、組合せ宝篋印塔３基、角塔約120基、無縫塔１基、石仏６基を確認している。

31. 墓地　(28)の約30m南西丘陵上に立地し、沖泊往還の西側に形成されている。墓域は南北15m、東西15mの範囲に広がる。石造物は、道に転落した一石五輪塔１基、組合せ宝篋印塔１基、角塔14基を確認している。

32. 墓地　(31)の約30ｎ南の丘陵鞍部に立地し、沖泊往還の東に所在する。石造物は、組合せ宝篋印塔の笠２基、台座１基を確認している。

33. 龍御前神社石造物　町並みの西部、金剛院東の丘陵南端に所在し、銀山街道に面している。石造物は、灯篭６基及び、鳥居１基を確認した。

34. 墓地　金剛院の所在する谷を金剛院墓地から道沿いに約50m北に上った東側に所在する。墓地は道から１段高くなった場所に形成されており、墓域は南北４ｍ、東西２ｍ程である。北側に隣接して、石垣を築いて敷地が造成されており、この敷地に関連する墓地の可能性がある。石造物は、一石宝篋印塔２基、一石五輪塔１基、組合せ宝篋印塔５基を確認している。

35. 石仏　延命院の西約40mから北側の丘陵急斜面を登るつづら折れ最上部に立地する。岸壁を削った窟内に、石仏４基を確認した。

今回の分布調査では、石造物の分布状況の概要把握に主眼を置いて調査を行ったため、石造物群の厳密な数量・形態の把握までは行っておらず、基礎資料の収集程度となっている。今後、形態・時期・銘文・宗派など詳細な調査を実施していく必要があろう。

参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山遺跡　石造物調査報告書１～５』2001～2005年
島根県教育委員会『石見銀山街道－鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』2004年
島根県教育委員会他『石見銀山総合調査報告書　第６冊　民俗調査・港湾調査・街道調査編』1993年
温泉津町誌編さん委員会『温泉津町誌』中巻・下巻1995年

第３節　西念寺と悉皆調査の概要

平成18年度の悉皆調査は、西念寺墓地のうち、主に西側の墓地を対象として、10月31日から11月２日までの３日間実施した。

今回の調査では、ほぼ崖とも言える斜面を加工して造られた窟とその前面に造成された平坦地とよりなる部分（群番号４）と、その北側に所在する墓地のうち光背型墓標の納められた窟（群番号５）を対象とした。

本墓地から確認された石造物は本来の状態を保っていると考えられるものは少なく、既に移動もしくは再組されたと判断できるものがほとんどであった。

なお、西念寺墓地の調査については次年度も継続する予定である。

表１　温泉津地区石造物分布調査の結果（温泉津・小浜）

仮番号	群	寺院との関係	上限	下限	概数	墓塔系				墓標系		その他		備考
						一宝	一五	組宝	組五	角塔	無縫塔	石仏	その他	
	1	恵珙寺								388				Ｈ17調査
	2	西楽寺	1758（宝暦８）	平成						(250)				
	3	西念寺						9	3	159		21		
	4	西念寺	慶長８			1	1	14		2	42	510		Ｈ18調査
	5	西念寺	1783（天明３）				4	5		24	1	12	舟形板碑2 六角柱型1	
	6	金剛院	1617（元和３）				3	1	2	30	8	6	笠付角塔	
	7	龍澤寺	1728（享保13）								9	10		
	8	龍澤寺	文政２	昭和						(180)		5	灯篭５	
	9	極楽寺			小浜地区	8	9	14	5	570	28	44		小浜地区
23	10	(極楽寺)	天保					1		(65)		1	陶器製墓1	
24	11	延命院			小浜地区			1				5		小浜地区
22	12				小浜地区							2		小浜地区
1	13											6		
2	14							1		1				
3	15		1613（慶長18）						(2)					大久保長安逆修塔
19	16											30		
8	17	(○○屋)	文化	明治						(40)			花崗岩系の墓石１	
7	18	(○○屋)	1838（天保９）					1				2		報告書-36
6	19	(○○屋)								(10)				
5	20		1773（安永２）	明治44		1		2		5	1		花崗岩製墓石１	報告書ー25．27
9	21			昭和12						12				
10	22		1799（寛政11）	明治30			2	10		45				報告書ー38
12	23		明治13	昭和９						8				
13	24									29				
14	25								1	2				
15	26	海蔵寺跡		(大正)					1	20		1		
16	27	海蔵寺跡								3		6	陶器製墓1	
17	28	(○○)(○○)	1850（嘉永３）					1		60				コンクリート塗装
18	29											5	石碑１	報告書ー22
	30			大正６				(３)		120	(１)	6		報告書ー31
	31		文化14	明治６			1	1		14				報告書ー30
	32							3						報告書ー29
	33	龍御前神社	文久										灯篭6鳥居1	
	34					2	1	5						報告書ー32
	35				小浜地区							4		

第３図　温泉津地区石造物分布図（S＝1／2000）

第４章　西念寺墓地の調査（１）

第１節　西念寺の概要

西念寺は、島根県大田市温泉津町温泉津イ787番地、沖浦の小路の最奥に所在する、浄土宗（本尊阿弥陀如来）の寺院である。

寺所蔵の『天正十三年　西念寺然休陳状案』や寺伝によると、寺の草創は石見銀山の極楽寺が温泉津に草庵を結んだことに始まるが、永禄４年（1561）３月に僧然休が温泉津に入り、寺の開基となったといわれている。

当初の草庵は３間×２間の質素な建物であったが、然休は別に屋敷地を貰い受け、岩を切り、山を崩し、谷を埋めて敷地を造り、大伽藍を建立したとされ、現在の境内地はこの時の造成ではないかと推測されている。創建当初の本堂は檜皮葺宝形造の七間堂で、後方の庫裡は７間×５間の板葺だったといわれている。

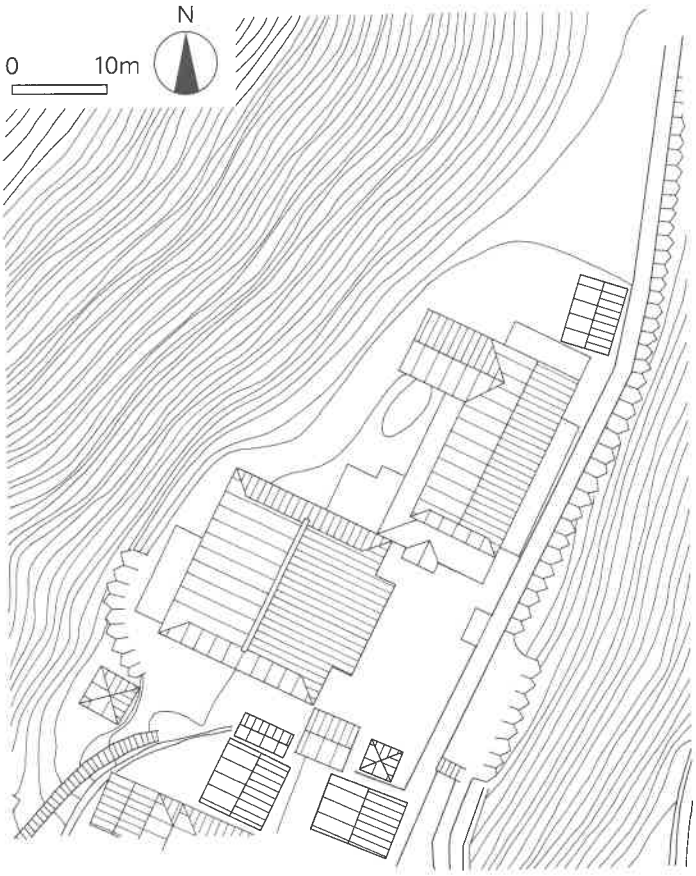
また、西念寺は当初より外部の権力に対してある程度の自由を保障されていた無縁所であり、毛利元就より自知行の奉書を受けていたほか、永禄11年（1568）からの毛利氏の九州立花城攻めの折、然休は師の三休（波根長福寺主）に従って御伽の一人として陣に加わり元就から感状を受けるなど、毛利氏との関わりが深い。

現在の境内は、南に面して薬医門形式の表門を開き、西に本堂、北に庫裡を配している。表門の東に経蔵、西に地蔵堂（享和３年（1803）、14世義山の代の建立）があり、本堂南西の山腹のやや高台には鐘楼堂が建つ。また、本堂と庫裡の間に書院、庫裡の北西に居室を設け、これらに囲まれた一画に池を掘り、山腹を背景とした庭が造られている。この庭には毛利時代に植えられたという梅の老木が今も残り、開基時の龍灯松とともに創建当時の姿を偲ばせている。また境内には、ほかに聚仏堂が建てられていたが、明治６年に廃絶された。

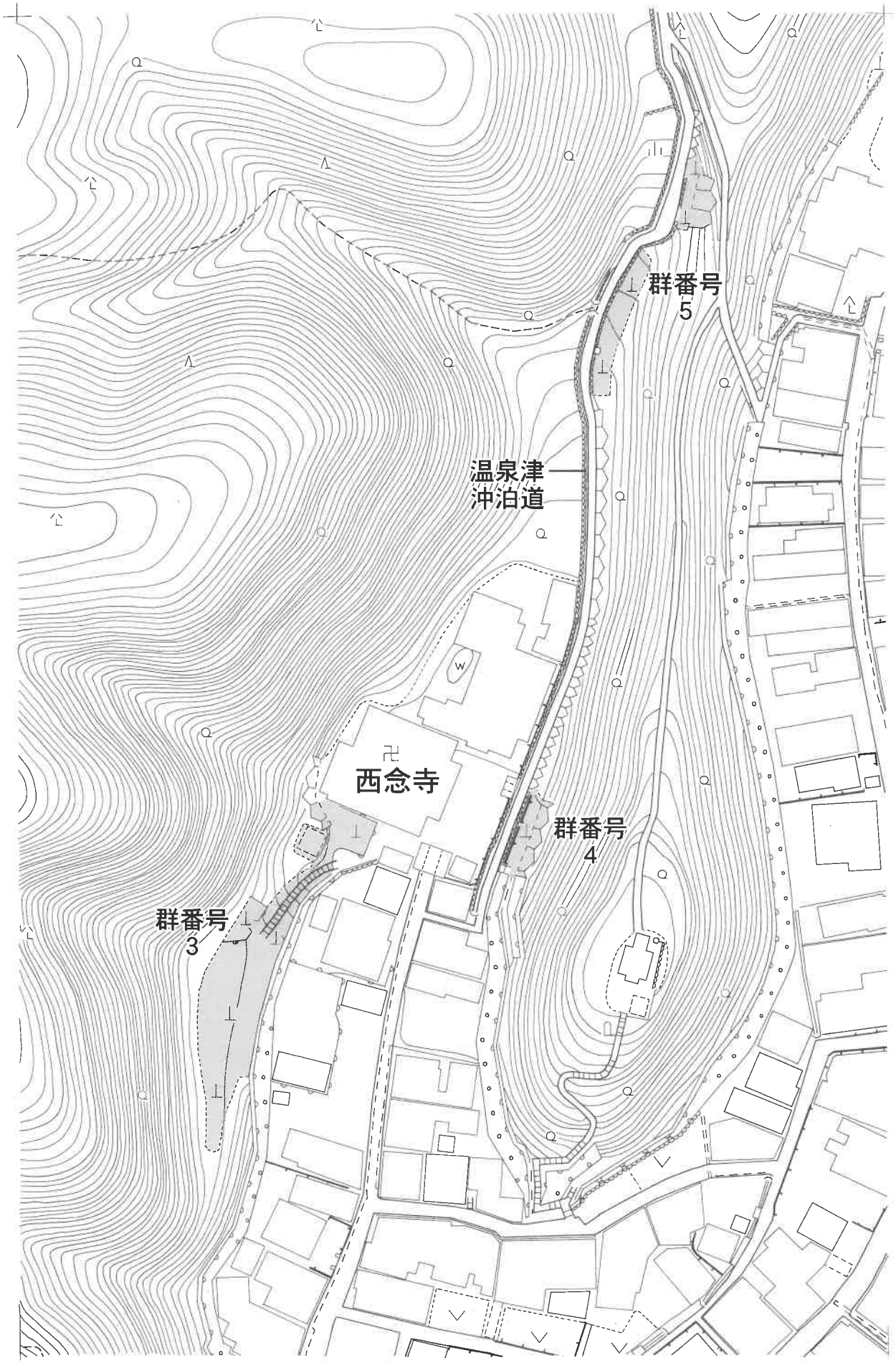
墓地は、東西の岩肌に取り付くように造られているが、一部には岩盤を刳りぬいて墓所としているところもあり、谷奥にある寺院の独特の景観を展開している。なお、境内東の土塀に沿って南北に温泉津沖泊往還（国指定史跡）が通り、東側の岩壁には「馬継ぎ石」が刳りぬかれている。この往還は、石見銀山街道温泉津沖泊道（国指定史跡）とともに、沖泊トンネルが開通する近代まで沖泊集落と温泉津の町並みを結ぶ生活道として使用されていた。

参考文献

『温泉津町誌　下巻』　温泉津町誌編さん委員会　1995年
『1991　温泉津　－伝統的建造物群保存対策調査報告書－』温泉津町教育委員会　1991年



第４図　西念寺境内配置図



第５図　西念寺周辺地形測量図・墓地配置図（S＝1／1000）

第２節　西念寺墓地の調査

浄土宗の西念寺は、温泉津の街を構成している西に開く北側の谷戸に位置している。境内の奥側に本堂が位置し、本堂の前面の北側斜面を造成して墓地が形成されている。また本堂の南側を走行している小径の南側の斜面を造成して、歴代住持墓と岩盤を掘削して３基の岩窟が設けられている。

本堂の横側を走行する小径は沢沿いに谷奥に連続しており、幅３尺ほどを測る。この小径沿いの南側斜面を造成し、一段高く岩盤を掘削して岩窟が設けられており、調査した伝松浦家墓所の他にも確認することができる。

小径から階段を設けて一段高く造成された歴代住持墓地は、小径沿いの東西の長さ7.5m、奥行き２ｍの中央部に、岩盤を掘削して東西3.5m、南北２ｍを方形に造作しており、合計22㎡を測る。歴代住持の墓塔には、一般的な僧侶墓地と同じく無縫塔が採用されており、総計18基が並べられている。

歴代住持墓塔の前側には石燈籠が配置されており、塀沿いの一部には古石塔の部材が集積されていた。

歴代住持墓地の西側には、岩盤を掘削して３基の岩窟が設けられており、谷戸の出口側である西側に立地する岩窟から１・２・３号窟と呼称した。

今回の調査は歴代住持墓地に隣接する３基の岩窟と、古道沿いに離れて谷奥に立地する松浦家の岩窟墓所を対象とした。

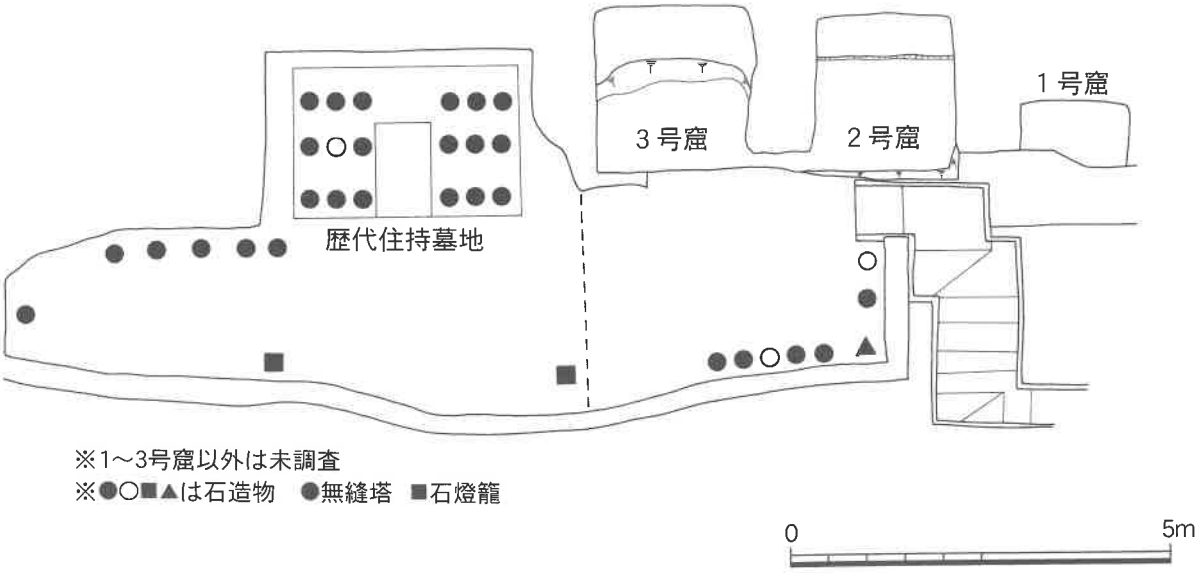
１号窟の調査

１号窟は、小径から階段で一段高く上がった正面やや西側に立地している。岩盤を垂直に切り落とし、正面幅140㎝、奥行き70㎝、高さ80㎝の箱型に掘削して造成しており、床面は平坦である。

１号窟の内部には５基の墓石が並置されており、墓石に鐫刻された銘文から○○屋の墓所であることが判明した。

５基の墓石は、いずれも頂部を円く仕上げた、幅に対して奥行きが劣る「円頂方形型墓標」であり、地域に特徴的な福光石を使用する点は、今回調査の全ての墓石に共通している。

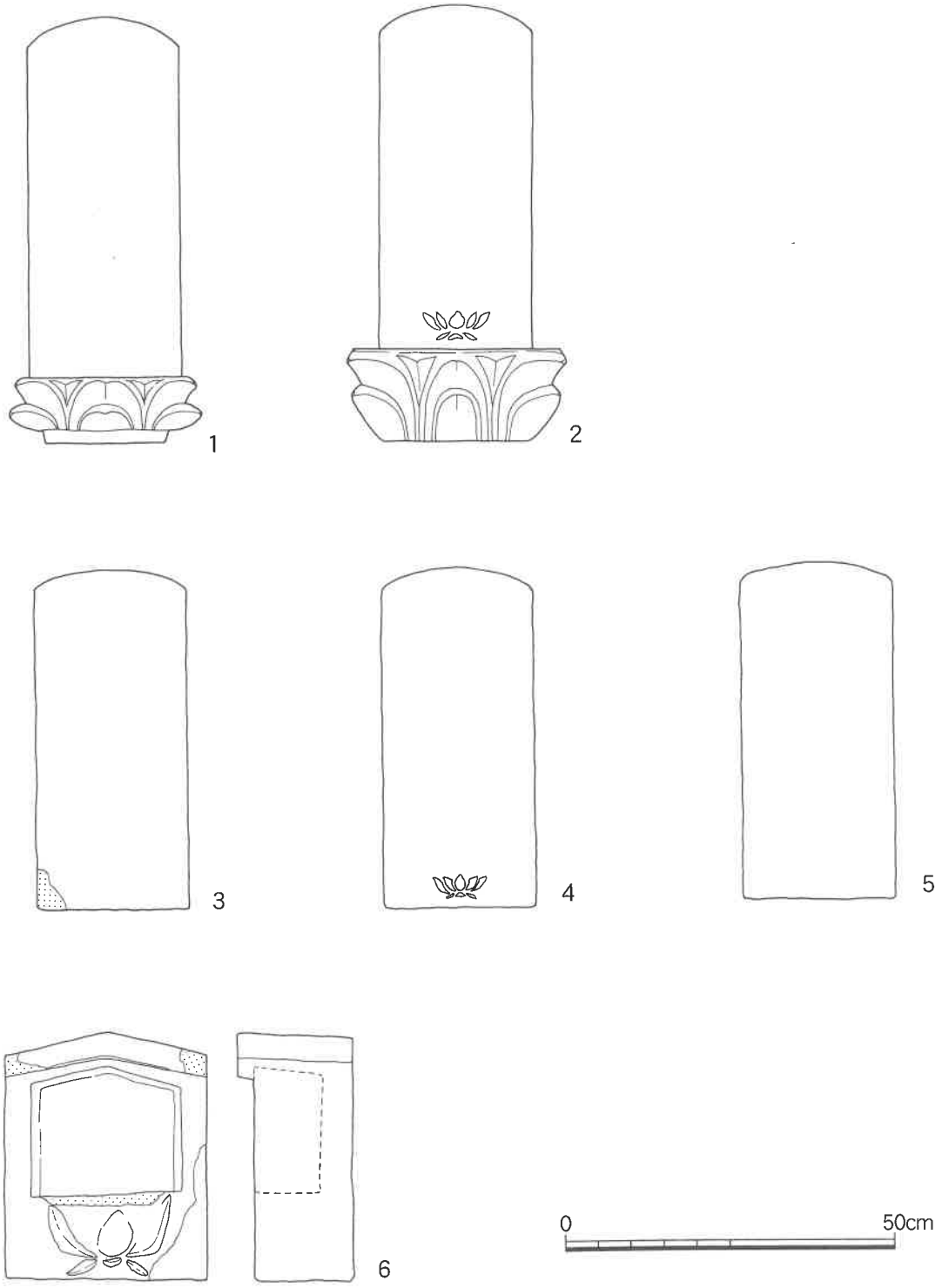
５基の円頂方形型墓標は、すべて２段の蓮華を表した台石の上に墓標本体を建てたものであるが、３基の台石は風化が著しく実測はできなかっ



第６図　西念寺墓地（群番号4）平面図（1）（S＝1／100）

た。墓標は、本体幅23cm（７寸）に規格されているが、高さは51～54cmと１尺５寸～１尺６寸の変容を示している。５基のうち２・４の２基の墓標本体下部には、蓮弁が表されている。６は幅30.5cm、高さ37.5cmの線香立てであり、正面には蓮弁を表している。

確認できる墓標銘文には、３が天保９(1839)年、４が元治２(1865)年、２が明治元(1868)年、５が明治33(1900)年、１が大正７(1918)年の紀年銘が確認できる。



第７図　１号窟石造物実測図（S＝1／10）

3は○○屋多十郎夫婦の世代墓、4は多平の個人墓、2は多七夫婦の世代墓、5は信七夫婦の世代墓、1は周吉の個人墓である。さらに認められる系譜関係からは、3→2→5→1の4代の変遷が確認でき、4はこの系譜ではない分家筋の墓石と考えられる。

すなわち天保9(1839)年から大正7(1918)年に至る79年間4代の変遷を墓石に窺うことができるところであり、大正7年以後は他地区に転出したものと判断される。

2号窟の調査

2号窟は、小径から上った階段の正面に立地している。岩盤を垂直に切り落として正面幅190cm、奥行き200cm、高さ165cmの箱型に掘削しており、床面は奥側の60cmを一段10cm高く造作している。この2号窟床面の様相は、本来は奥側の幅に並列できる石塔基数を対象として設置されたものであったことが推定される。

2号窟内には、隙間なく石塔部材が充填されており、実測が可能であった部材数は46点を数えた。すべて福光石を用いたものである。確認できた個体は、一石五輪塔1基、一石宝篋印塔1基、組合せ宝篋印塔6基(相輪部の遺存から判断すると10基)、無縫塔12基である。

1は総高91cmを測る一石五輪塔であり、先端部を僅かに欠損している。幅は最下の地輪で22cmであり、火輪部の目立つ地輪の縦長を特徴とする個体である。銘文は認められない。

2は相輪の上部大半を欠損した一石宝篋印塔であり、遺存高は61cmを測り、幅は笠部で23cmである。基礎部は一部欠損しており、塔身部正面には月輪を表している。笠部正面には外傾する隅飾りに先端が渦巻く弧線を表している。銘文は認められない。

3～5の3基は、総高106～115cmを測る組合せ宝篋印塔であるが、ともに本来的な組み合わせを保持しているものとは思えない。3は横長の基礎、軒の厚い外傾する隅飾りに弧線を表す笠部、九輪部を平滑に仕上げた細い相輪部を特徴とする。

銘文は基礎部に「月光□雲信士」と法名が認められる。

4は平坦に仕上げた隅飾りと、線刻を有する九輪を特徴とする。基礎部には「月宗妙□信女」の法名が認められる。3・4の基の石塔は、認められる法名の類似から夫婦墓として造立されたものと判断できる。

5は平坦に仕上げた隅飾りと、短縮した九輪部における線刻を特徴とする。塔身規模がいかにも小さく、組合せの本来的ではない点が窺われる。

6～13の8点は組合せ宝篋印塔の相輪であるが、6・7は同一個体の可能性もあり、7個体と考えられる。14～16の3点の組合せ宝篋印塔には相輪が伴っていない。6～13の相輪が伴うものと思われる。したがって遺存した相輪から判断する限り、2号窟内には10基の組合せ宝篋印塔の部材が存在した可能性が考えられる。

10基の宝篋印塔は、笠部と相輪における変容を確認できる。笠部では、①隅飾りに線刻を有し軒下に連弁を表す16、②厚い軒と線刻を有する隅飾りの3・14・15、③厚い軒と平滑な隅飾りの4・5、の3類が認められる。

相輪では、①九輪に線刻した4・5、②長い平滑な九輪部の3・10、③短い平滑な九輪部の8～12、の3類であり、笠部の類別に対応するものと思える。

無縫塔は12個体が確認された。台石と組合わさって遺存した資料は17・18の2基であり、17で総高77cm、18で総高106cmを測る。塔身の突出する頂部を除いた高さは26の40cmを最低として、20の86cmを最大としている。

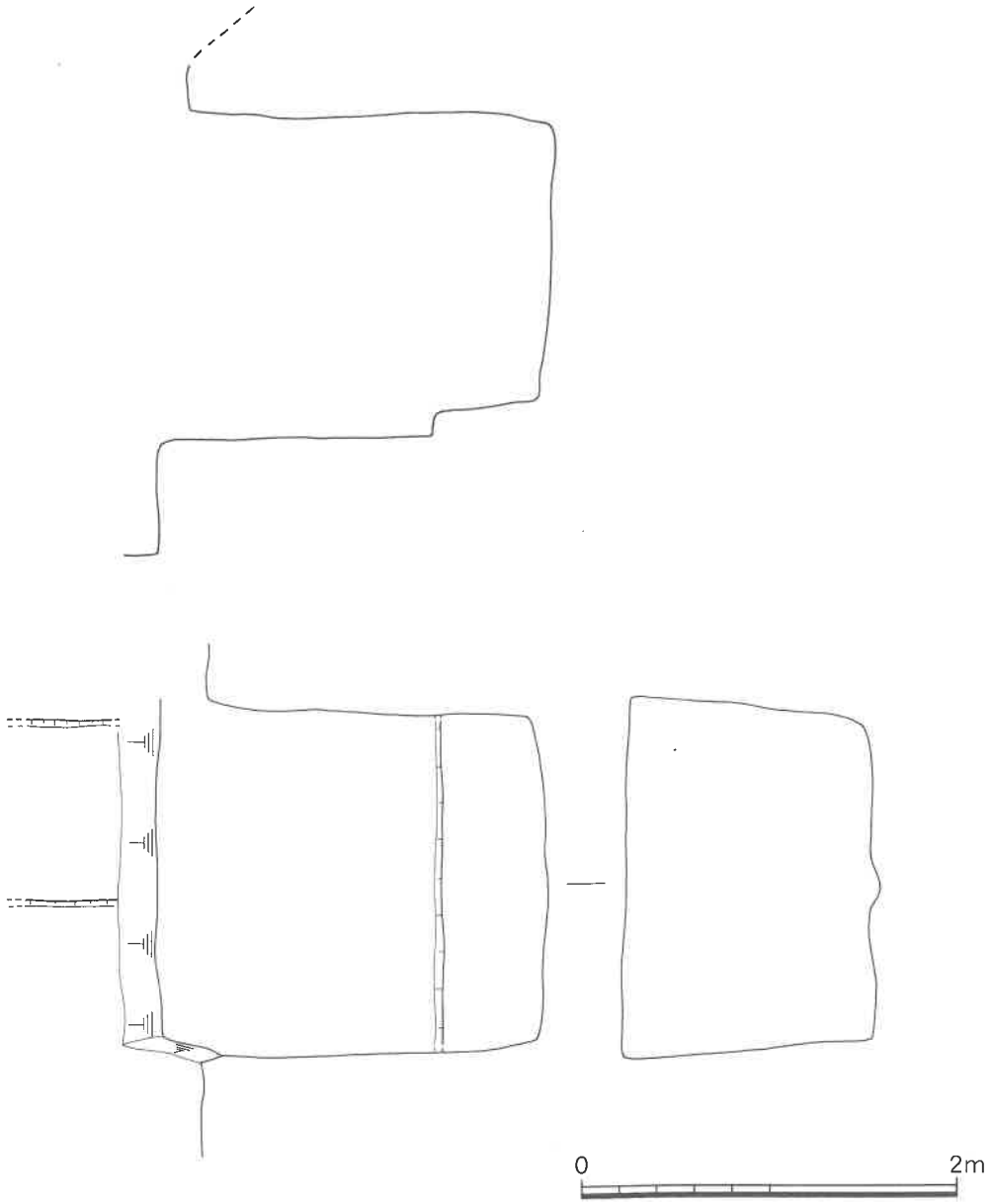
12個体の無縫塔のうち、17・18・21・23・26の5個体に銘文が確認できた。このうち紀年銘の確認できたのは17の享保16(1731)年であり、「弘音院住縁誉西欣大徳」の法名を確認できる。西念寺

と有縁の弘音院で逝去した縁誉西欣の墓塔と確認することができる。

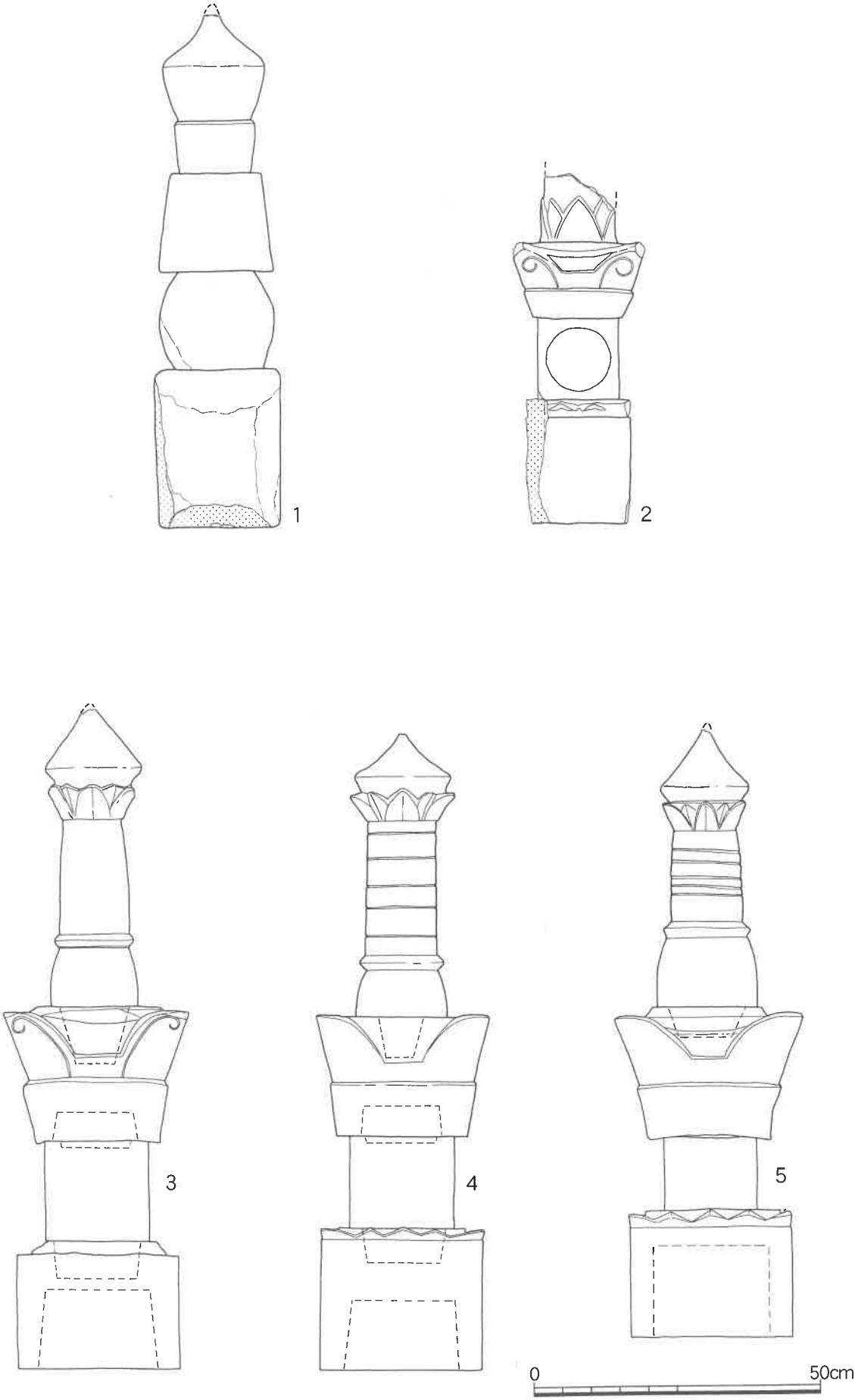
18は蓮社号を有する俊誉上人の弟子の「徳蓮社崇誉上人寛隆」の墓塔である。21は西念寺十世の「基誉上人」の墓塔であり、石塔施主は次代の西念寺住持と想定できる。23は法名が知れるのみであり、26の「□誉浄心比丘」は「□□四丁亥十月十三日」の没年が知られる。頂部の扁平化を特徴とする無縫塔の変遷からは、明和４(1767)年の没年と判断できる。

これら12個体の無縫塔は、21に明示される如くに歴代住持と西念寺有縁の僧侶の墓塔と確認できるところであり、再建される以前の歴代住持の墓塔を含むものである。

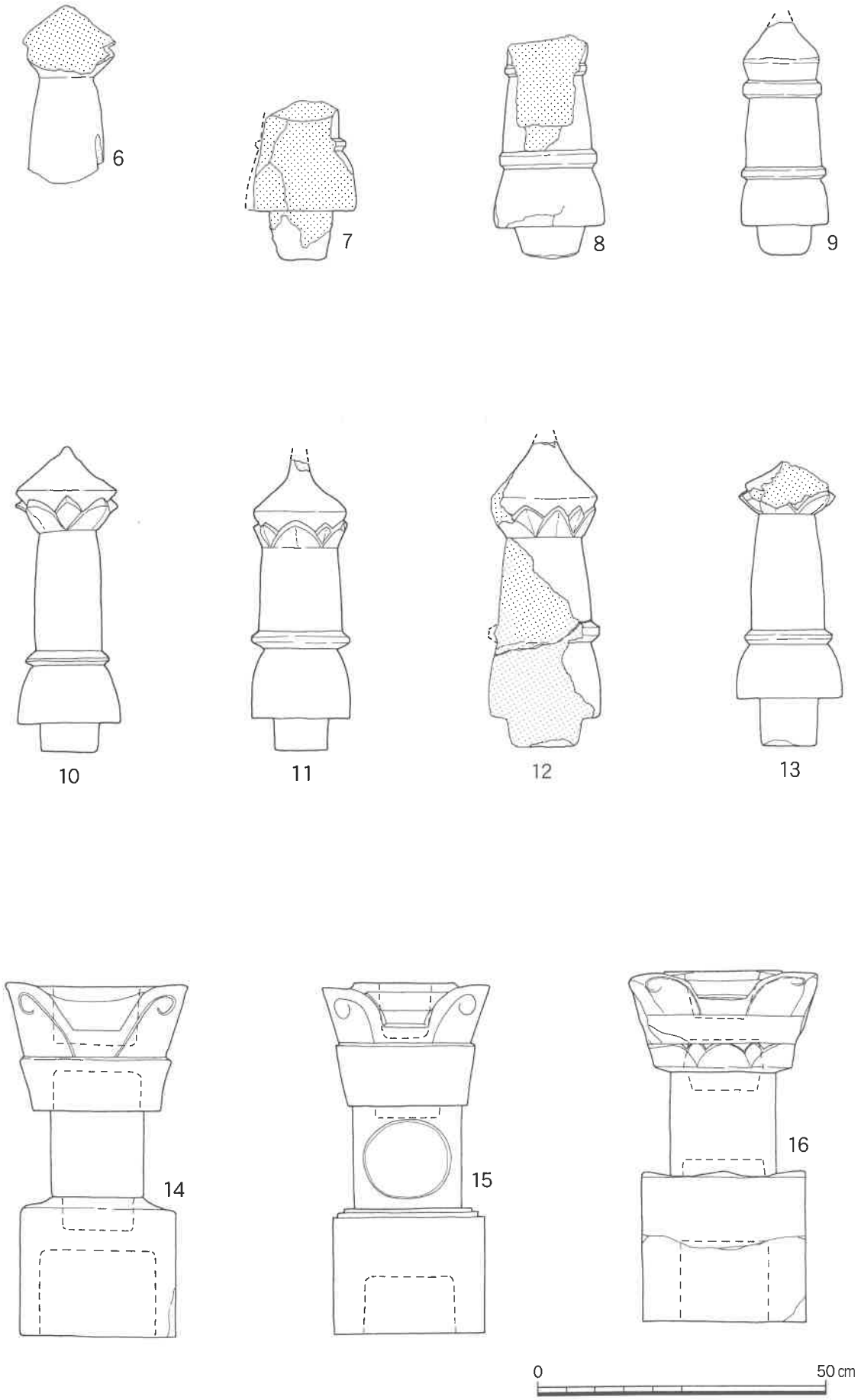
２号窟は、12個体の無縫塔が後世に集積されたものと判断され、本来は組合せ宝篋印塔を主体とする墓所を形成していたものと判断される。一石五輪塔と一石宝篋印塔を含めていずれにも紀年銘



第８図　２号窟実測図（S＝1／40）

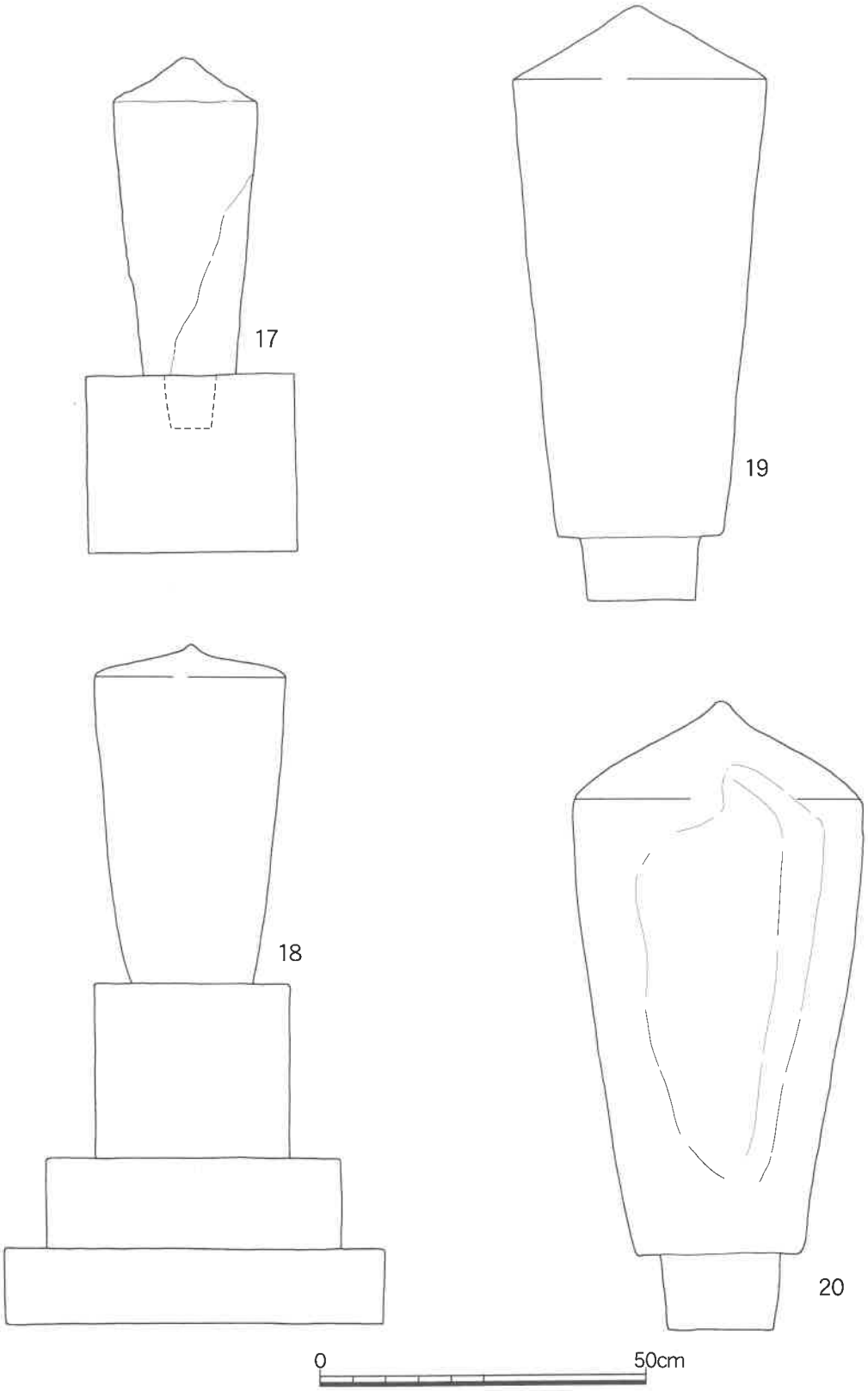


第９図　2号窟石造物実測図（1）（S＝1／10）

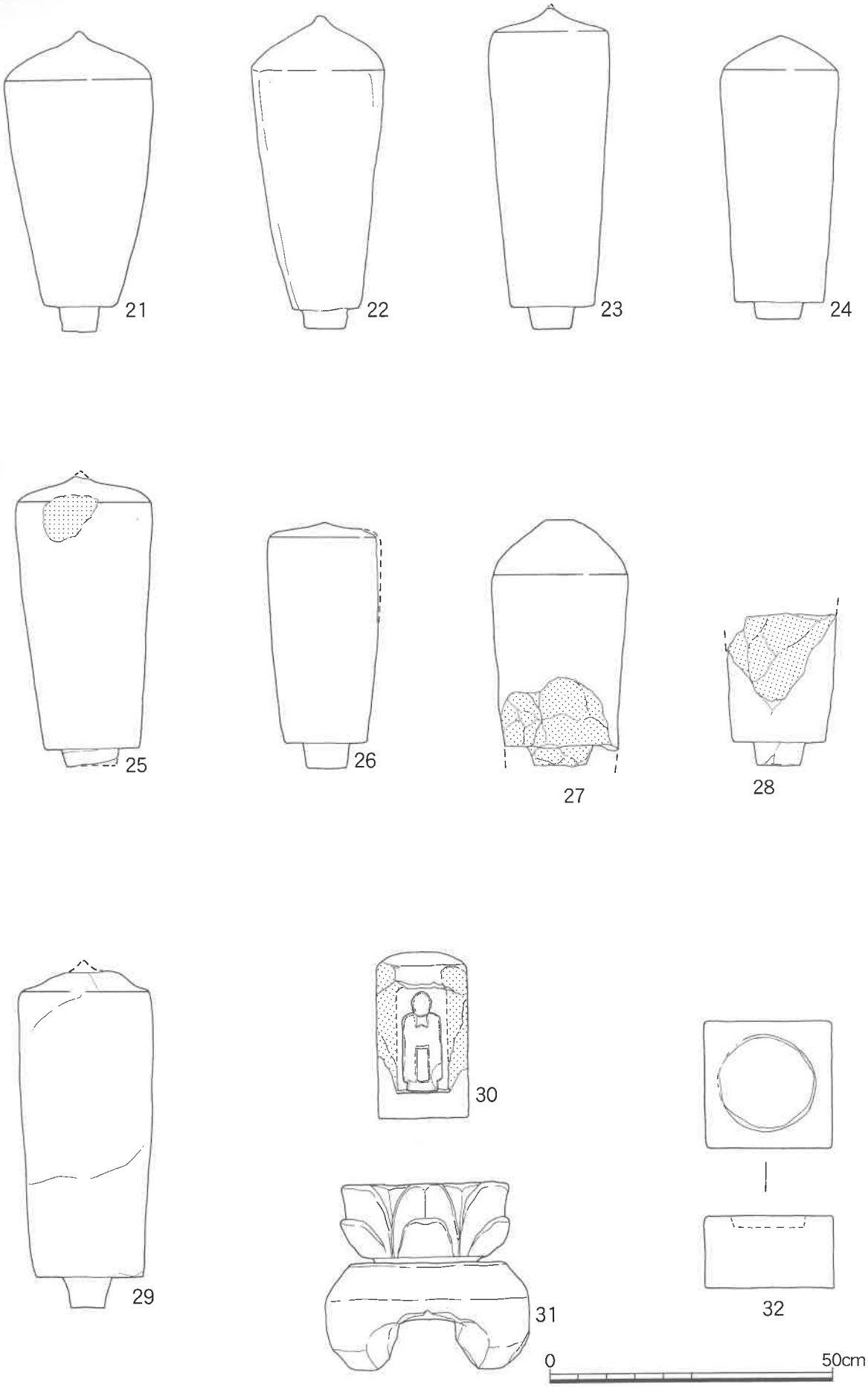


第10図　２号窟石造物実測図（2）（S＝1／10）

は確認できないが、近世墓標が主体を占める以前における様相として江戸初期の17世紀代に形成された有力檀越家の墓所であったものと推定されるところである。



第11図　２号窟石造物実測図（3）（S＝1／10）



第12図　２号窟石造物実測図（4）（S＝1／10）

3号窟

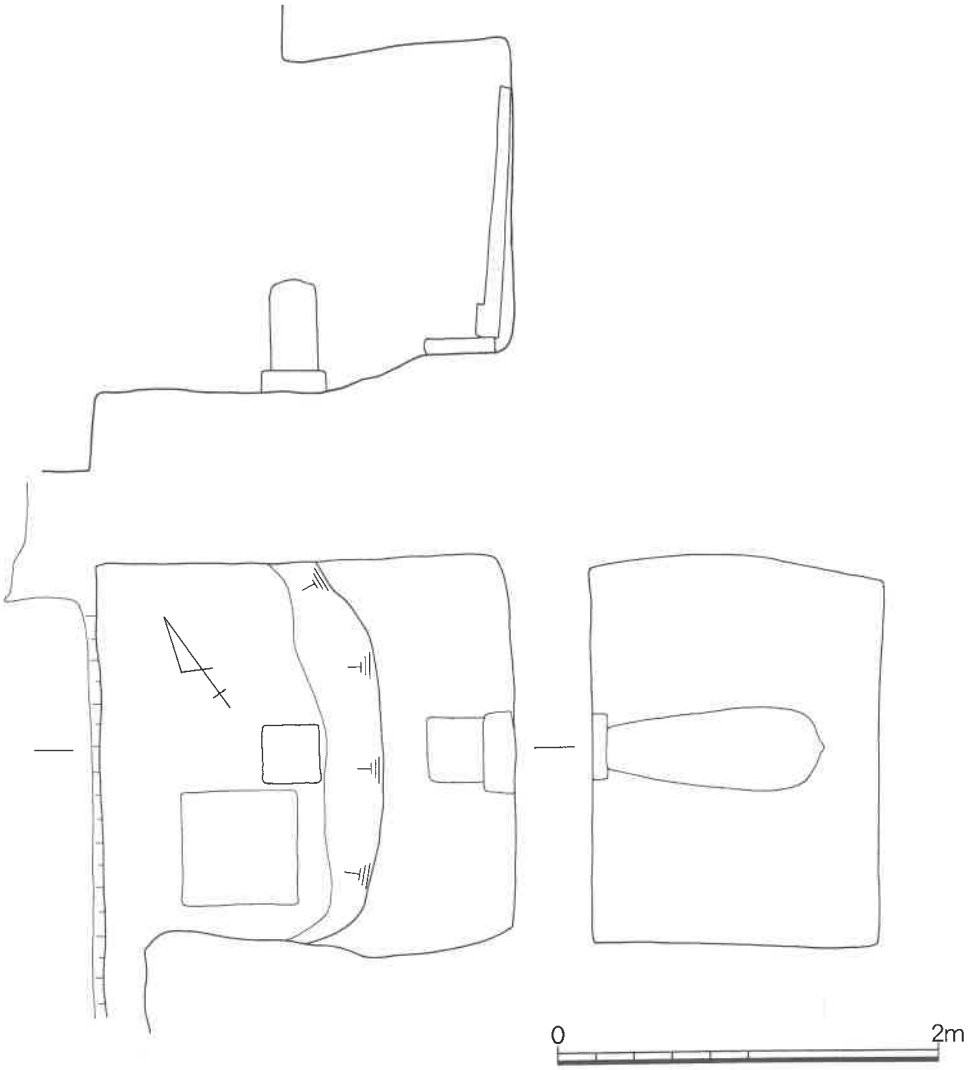
3号窟は、2号窟に並列して歴代住持墓地の西側に位置する。切り立った岩盤を正面幅198m、奥行き210m、高さ180mの箱型に掘削して造営したものであり、内部床面奥側の40cmは20cm高く造作されている。

調査以前の状況は、正面中央の奥に光背型の大型墓標が位置し、この前面に2基の墓標・記念碑が配置され、光背型大型墓標の左右前面には板材によって棚を造作して極めて多数の地蔵石像が集積されていた。

1は高さ128cm、下部幅30cm、上部幅44cmの頂部を突出させた光背型墓標であり、厚さは下部で12cm、上部で6cmを測る。墓標下部の厚く造作した部分には3枚の連弁を彫刻しており、下端には幅14cm、長さ7cmの枘を造作している。本体周囲には幅2cmの縁を巡らしており、幅38cm、長さ35cm、厚さ9cmで中央奥に枘穴を有する台石を伴っている。

表面中央には大きく「南無阿弥陀仏」の名号を表し、この左右に合計17人の法名を認めることができる。最下には「慶長十五／三月十五」の紀年銘を確認できた。

2は高さ48cmの円頂方形墓標であり、享保年間の肥後屋関連の墓石と確認できる。3は総高98cm



第13図　3号窟実測図（S＝1／40）

の頂部の平坦な平頂方柱型を呈する記念碑であり、正面に「○○蕉厳之碑」と確認できる。正面および左右側面に合計12人の世話人の名前を確認できる。

3号窟内の遺物の主体をなすのは多数の小形地蔵石像である。これらの多くは頭部を欠損しており、頭部の遺存したものでは全長14～17cmを測るものが多い。厚さ2～3cmの連弁を表した台部と合わせて一石彫成されている。これらは像容により以下の7類に区分できる。

Ⅰ類・両手を合わせ念珠を持つもの（地持地蔵）～97点・（刻書15点、墨書6点）

Ⅱ類・両手をあわせ合掌するもの（宝性地蔵）～30点・（刻書4点、墨書4点）

Ⅲ類・右手錫杖、左手に如意珠を持つもの（鶏亀地蔵）～35点・（刻書3点、墨書2点）

Ⅳ類・両手で幢幡をもつもの（法印地蔵）～46点・（刻書5点、墨書2点）

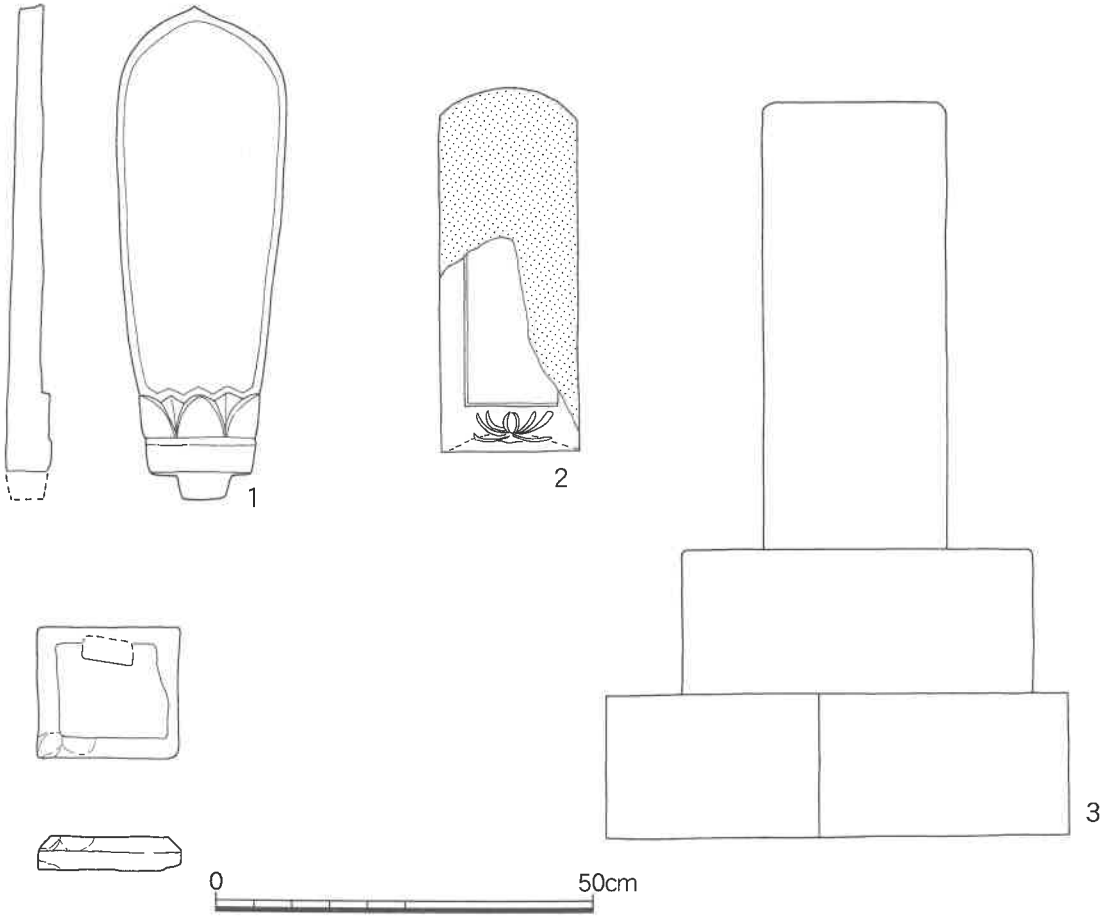
Ⅴ類・両手で念珠をもつもの（地持地蔵）～23点・（墨書4点）

Ⅵ類・両手を袈裟で隠すもの～46点・（刻書6点、墨書4点）

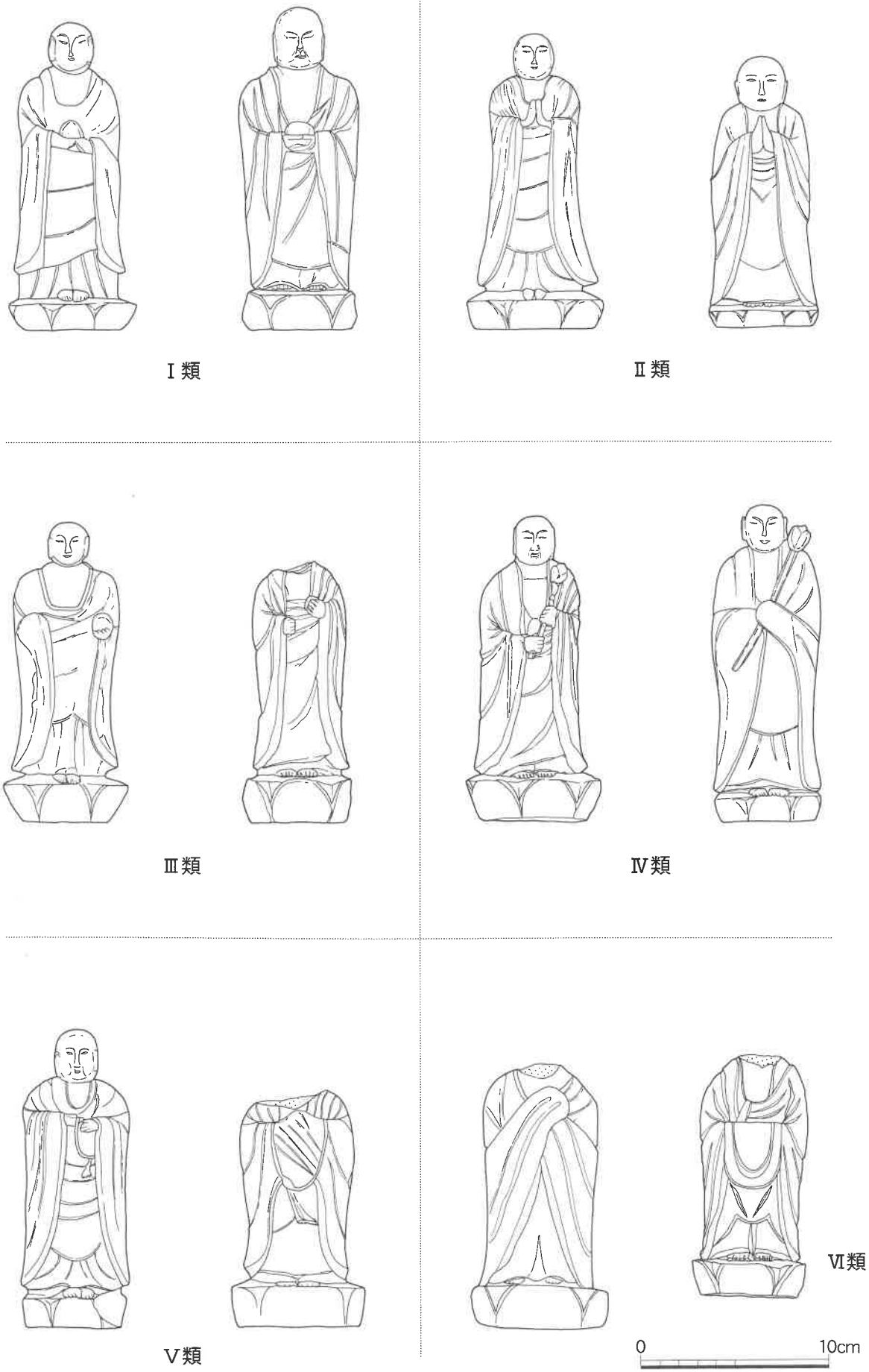
Ⅶ類・印を結ぶもの（陀羅尼地蔵）～8点・（刻書4点、墨書1点）

Ⅷ類・柄香炉を持つもの（法性地蔵）～5点・（刻書2点）

以上の総計290点のほか、光背付き2点、大・中・小型の坐像が24点、風化著しく像容不明なも



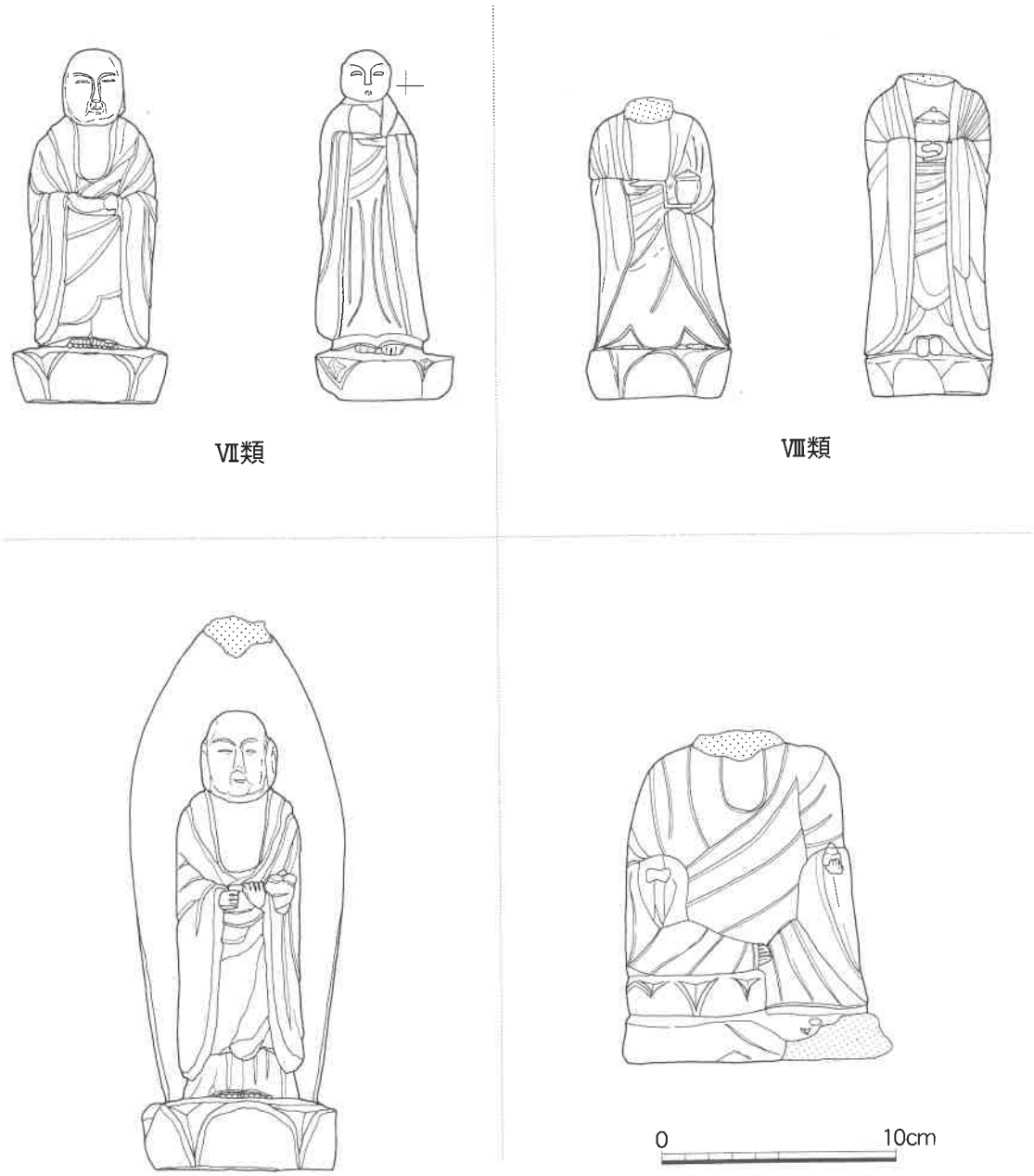
第14図　3号窟石造物実測図（1）（S＝1／10・1はS＝1／20）



第15図　3号窟石造物実測図（2）（S＝1／10）

の57点を加えると、３号窟内に集積されていた地蔵石像は合計373点を数えた。これらは六地蔵として認識されるが、像容の変容に従って８類を区分することができた。

各類で確認できた刻書文字・墨書文字の総計は73点を数えたが、摩滅・風化により判読できたものは少ない。判読できた代表例は、「崇徳院宗月居士」・「万人講」・「三界万霊」・「施主石工源内」・「○○童子／ヒスイ香川」・「○○童子／俗名富二」・「施主○○三エ門／為現當二世祈願成就／オカメ」・「明和九年／釋○○○／サヌキヤ十右エ門／タツ三月十三日」・「石工傳六」・「甚七作」・「○○○童子／村上氏」・「○○院○○信女」・「サスガ／○○信女／椋右エ門」・「ギン山／施主ヲハツ／千體之内」・「○○信士／施主ギン山イソ」などである。



第16図　３号窟石造物実測図（3）（S＝1／3）

これらは法名を記しており、故人の冥福を祈って奉納されたものと思われる。近世においては、一般的に地蔵は子供の墓として造立された例が顕著であるが、ここで確認された法名では必ずしも子供の法名が主体を成すものではない。

記された内容は銀山に及び、浄土宗に限定されてはいない。確認できた紀年銘は明和９(1772)年のみであるが、温泉津に流行った追善供養の方式と想定できる。

また石工としては源内・傳六・甚七が確認され、江戸時代の石造物の主体をなす墓石には名を残さない福光石工の一端が窺われる。

400点に近い小形地蔵石像は、後世の18世紀代に奉納・集積されたものであり、３号窟は本来中央に配置された光背型大型墓標を設置するために掘削されたものと想定される。墓標には慶長15(1610)年の紀年銘が確認されており、この時点で浄土宗・西念寺の檀家として先祖諸霊を合祀したものと判断される。確認できた17人の法名のうち、浄土宗に特有の誉号法名が認められるのは３名に過ぎない。

３号窟と２号窟は同規模・同構造で並置している。３号窟の光背型大型墓標と２号窟の組合せ宝篋印塔の相違があるとはいえ、同時期に有力檀家の墓所として掘削され、以後の状況により使用法に変化が起こったものと思われる。

４号窟（伝松浦家墓所）

１～３号窟から離れて小径沿いの沢の上流側に、同様の岩窟構造の伝松浦家墓所が位置している。尾根裾の岩盤を前幅360㎝、奥幅300㎝、奥行き450㎝、高さ230㎝に掘削して構築しており、天井部は奥側の280㎝の範囲に認められた。

奥壁沿いの床面は幅80㎝が30㎝高く造作して壇を形成しており、この壇上に組合せ宝篋印塔３基と光背型大型墓標２基が配置されている。

３基の組合せ宝篋印塔の塔身は別に集積されており、総高は不明である。基礎幅40～42㎝、高さ35～40㎝、相輪の高さ61～71㎝の規模である。

３基ともに類似した大型組合せ宝篋印塔であり、笠部では軒の下の連弁表現と隅飾りの弧線を特徴とし、相輪では伏鉢と九輪を分かつ突帯上の連弁を特徴としている。笠部の段級により１・２と３に区分される。

銘文は２の基礎部に確認された。「慶長十八□□／為尊誉□□」であり、慶長18(1613)年の造立と知れる。

４の光背型大型墓標は下部幅29㎝、上部幅40㎝、高さ101㎝の規模であり、頂部の尖った下部に３枚の連弁を表している。墓標表面は摩滅により何らの銘文も確認できない。

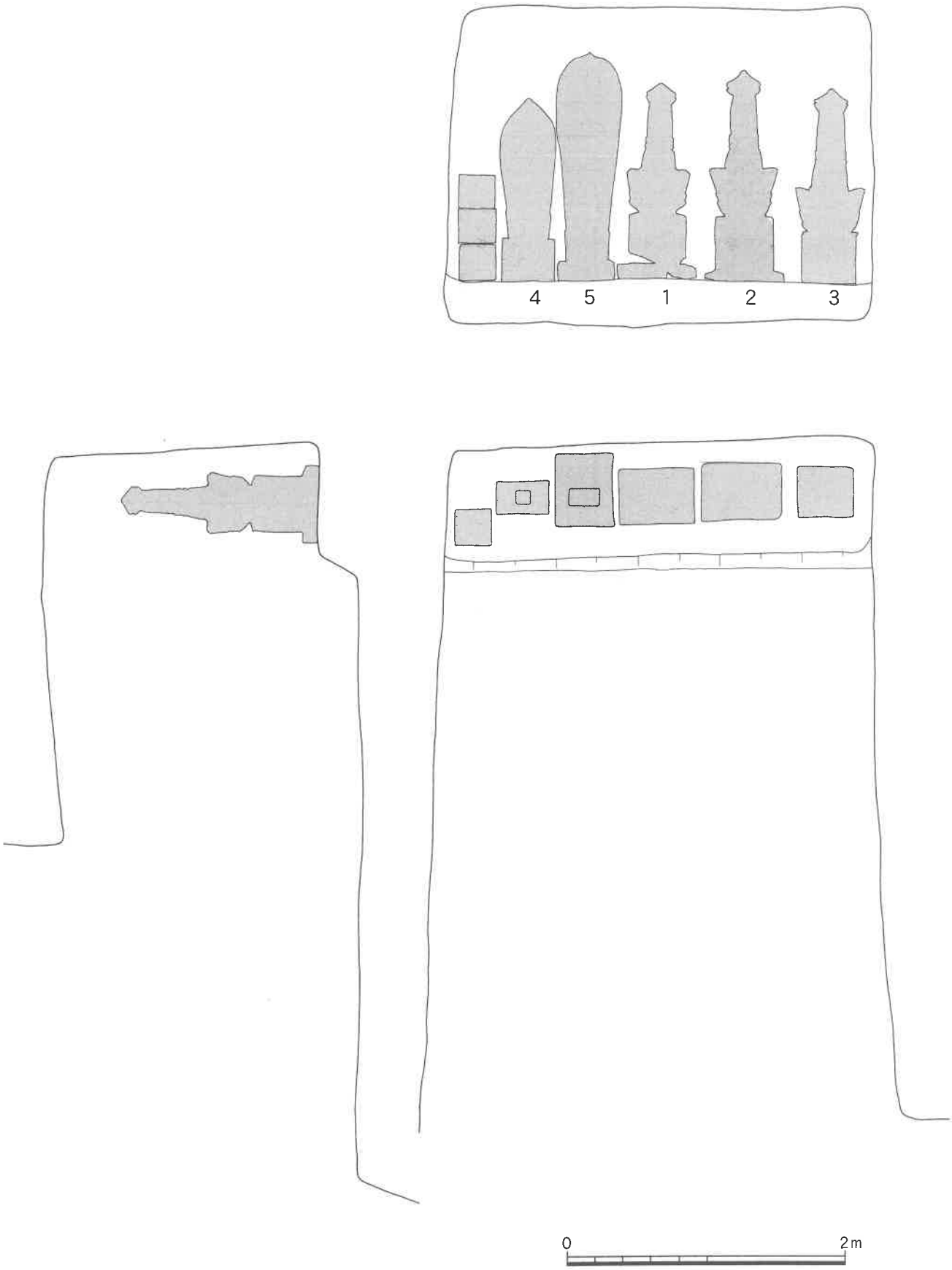
台石は幅38㎝、厚さ23㎝、高さ307㎝の大型のものであり、この表面に「遠祖松浦平兵□□／之姉隠誉□□／誉妙□□」の銘文が認められ、松浦家墓所たる点を確認できる。

光背型大型墓標の５は、下端幅30㎝、上幅47㎝、高さ150㎝、厚さは下部12㎝、上部６㎝を測る頂部の尖る形状である。下部には３枚の連弁を表し、下端部には幅15㎝、長さ12㎝の枘を造作しており、これを受ける台石は幅42㎝、長さ52㎝、厚さ14㎝を測る。

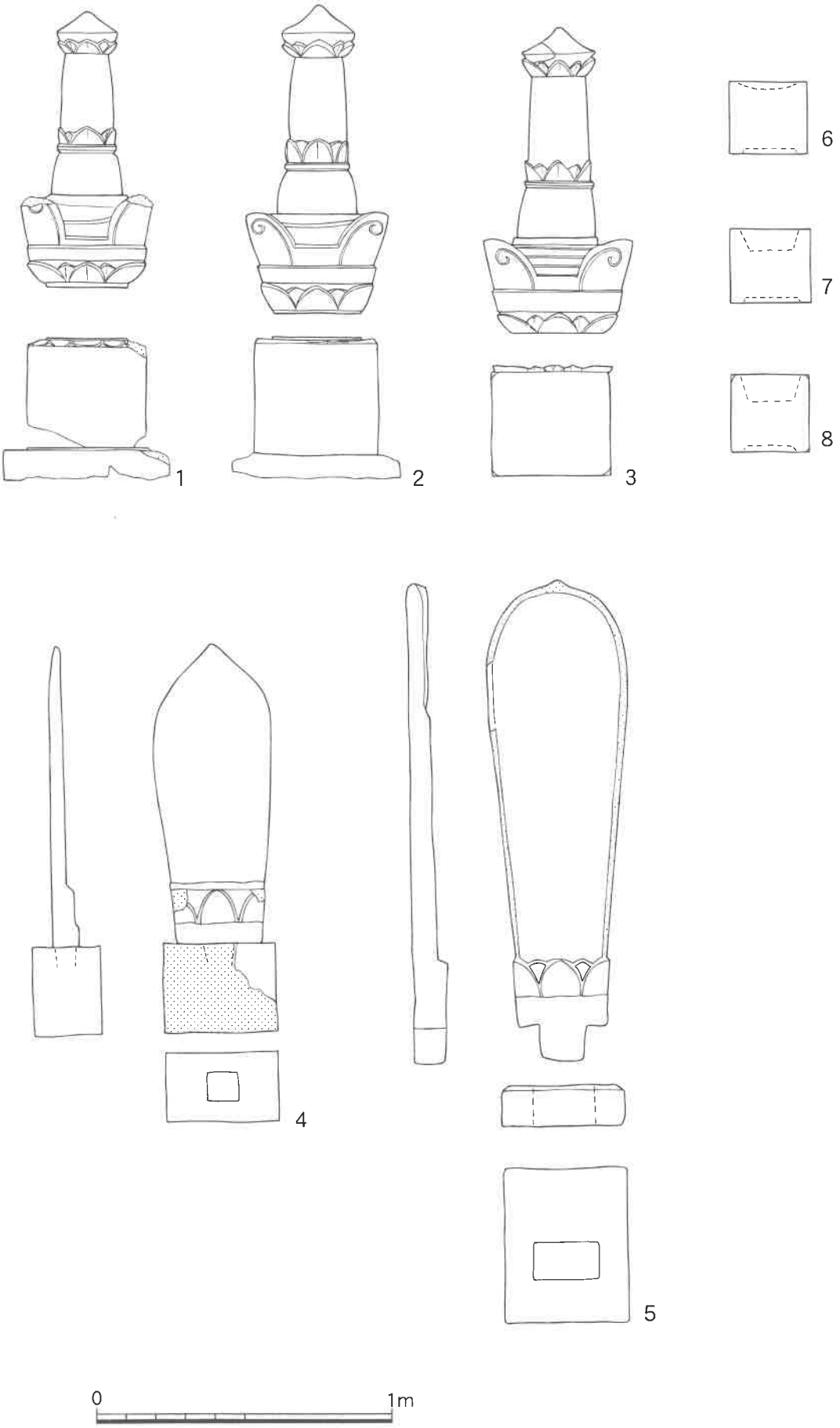
中央に大きく「南無阿弥陀」と表し、上部左右に「宗岩□□」、「覚翁孟□」の２名の法名、下部に「慶長□年□月十五日」の紀年銘が確認できるほかは摩滅により明確ではない。

西念寺過去帳にも松浦家墓所は「本寺貞洞中」と認められ、当初より岩窟を松浦家墓所として造営した点が知られる。

伝松浦家墓所を含めて調査した都合４基の岩窟墓所は、温泉津という中世以来の伝統を有する港湾地区における限定された土地利用の実際を明示しており、有力檀家墓地の状況を今に伝える貴重な遺構と位置づけることができるのである。



第17図　伝松浦家墓所平面図（S＝1／40）



第18図　伝松浦家墓所石造物実測図（S＝1／20）

まとめ

西念寺墓地の調査では調査期日が限定されたこともあり、特徴的な岩窟墓所に限って調査を行った。江戸時代初期に遡及して造営された岩窟墓所は2号・3号と4号（伝松浦家墓所）であり、2号窟では組合せ宝篋印塔、3号窟では光背型大型墓標、松浦家墓所では両者の混在という墓石の差異が認められた。

確認できた紀年銘は、3号窟では光背型大型墓標の慶長15（1610）年、松浦家墓所では光背型大型墓標の慶長□年、組合せ宝篋印塔の慶長18（1613）年である。

温泉津を含めた石見銀山周辺では、中世に遡及して五輪塔・宝篋印塔が墓塔として造立されており、特に一石五輪塔・一石宝篋印塔が多用されている。この点に鑑みれば、西念寺に付設して造営された岩窟墓所では、光背型大型墓標に先行して組合せ宝篋印塔が採用されたものと考えられよう。

現在までに判明しているところでは、温泉津地区に特徴的な光背型大型墓標は、西念寺では3号窟の本体高さ128cmの慶長15年例、松浦家墓所の本体高さ150cmの慶長□年例と、本体高さ101cmの紀年不明の3例が所在している。

このほかでは日蓮宗・恵珖寺に本体高さ109cmの慶長5（1600）年例が知られている。

この恵珖寺資料も状況からは岩窟に配置されていた可能性が高い。

現在知られる光背型大型墓標4基はいずれも慶長年間の造立と確認できるところであり、この時期に新たに採用された墓標型式として関西方面との関連が考えられよう。

銀山周辺における墓地・墓石の様相は、従前調査を行ってきた銀山地区においては丘陵尾根の斜面ないしは頂部における墓塔から墓標への変遷が確認されてきたところであるが、港湾地区である温泉津地区においては特徴的な岩窟墓所と光背型大型墓標の採用を特徴としている。

限定された空間を墓地として利用する場合に、周辺の岩山を掘削して墓所を造営する様相は、中世都市・鎌倉の周囲山麓に密集造営された“やぐら”を彷彿させる。新様相の把握は、墓地の継続調査が将来した重要な成果の一つと認識されるところである。

江戸時代の初頭に遡及する特徴的な岩窟墓所の調査を、今回の最大の成果とするところであるが、あわせて第3号岩窟墓所内に多数集積されていた小型地蔵石像の確認も、江戸時代における追善供養の一つの実際例として、興味深いところである。

温泉津を含めて石見銀山周辺では、墓石の大半は地元算出の福光石を用いている。

この加工の容易な、しかしかなりの耐久性のある凝灰岩質砂岩を利用したことに起因しての特徴的な一石五輪塔、一石宝篋印塔の盛行とも考えられるところである。

しかし福光石工は、基本的には墓塔・墓標を含めた墓石には石工銘を鐫刻してはいない。この点は本邦諸地域例と同じである。一般的造形物としての墓石ではなく、他の石造物に石工銘を留めている。確認できたところは「源内」「傳六」「甚七」の3名である。

類似した小型石像は銀山羅漢寺の石室内に安置されていた羅漢像があり、ここでも同様に若干の石工名が確認されている。

地域に活躍した石工集団の実際は、製品である石造物の調査により明確になるところであるが、あわせて石切場などを含めて関連する総合的調査も必要であろう。

第5章　総　括

1）平成18年度の石造物調査は前年からの継続として温泉津町地区で実施した。調査の狙いは港湾町として栄えた当地区における石造物、とりわけ墓石の形状と集群状態を把握してその特性を明らかにすることにある。

すでに17年度には恵珙寺境内墓地において廟式墓なる特徴的な墓群の存在を確認したところであるが、今年度はさらに港の停泊地近くに位置する西念寺墓地の一角を対象とし、そこに所在する岩窟墓所の悉皆的調査を試みた。

浄土宗西念寺は1561（永禄４）年の建立とされ、寺地は毛利元就より寄進されたと伝えられる。当初は７間４面の規模を有するかなり規模の大きな道場であったともいわれる。沖泊往還の起・終点近くの狭い谷間に位置する現堂宇と南側の岩面に掘削された墓窟、両者の間を東西に走る小径の往還道が寺院建立時から並存していたか否かは定かではない。しかしながら、これらが中世末期から近世初頭には現状とあまり大きな変化のない状態で存在していたことは今次調査から十分想定されたところである。

2）既述のように、小径沿いの北面する崖面には３箇所に岩窟が掘り込まれ、そこに多数の墓石が遺存していた。即ち１号窟は19世紀中頃から20世紀前半に至る「○○屋」の累代墓所で「円頂方形型墓標」で占められていた。この「○○屋」が中世末の廻船問屋に系譜をもつ一族とは断定できないが、墓所の営み具合からして有力町人層を構成する氏族であった可能性は高いとしてよいだろう。２号窟は一石五輪塔・宝篋印塔、組合せ宝篋印塔８基以上の中世的墓塔群からなる墓所で、これらに12個体の無縫塔が加積されていた。無縫塔の１基が西念寺十世と確認できたことで一連のこの種の墓塔が彼寺の歴代住職と関わり深いものであることが推定される。ただし、これらの無縫塔は本来の位置から移動・集積されたことが考えられた。３号窟は慶長15年銘（(1610年）を有する光背型墓標１基と円頂方形墓標、平頂方柱型記念碑に多数の小型地蔵石像からなる。この窟は近世前葉期に西念寺有力檀家の祖先霊合祀所として始発されたが、18世紀代には追善供養の場として利用されたことが知られた。以上、これら３窟よりさらに東に所在する岩窟は廻船問屋松浦家の墓所と認定された。ここでも大型光背型墓標を中心に大型の組合せ宝篋印塔３基で墓所が形成され、その営為期は近世前半とみられる。

3）今次調査は、その施行範囲はごく限定されたものであるが、400基を超える石造物について形状・石材（福光石製）・使用期等について詳細な記録を作成し、港町に位置する墓所の特性について少なくない知見をえた。

その一つとしては廻船問屋等を営む有力町人層の墓所のあり方が判明したことをあげるべきであろう。また、それら町人層と寺院の結びつきについても考察の糸口が得られたものと考える。ことに３号窟と伝松浦家墓所で確認された大型の光背型墓標は累代墓の集積・統合墓石として大規模に造立されたもので、このことの裏には繁栄する海上交通において彼等が重要な役割を担い、財力を蓄積しつつあったことをうかがわせている。

温泉津の地区においては先述のように恵珙寺墓地で異色の廟式墓所の存在が知られたところであるが、西念寺墓地の一角を構成する岩窟墓所もまた特徴的な埋葬所として理解することが可能とされた点が注目される。池上教授の指摘によればこの岩窟墓所が遠く関東の鎌倉付近に群在する「やぐら」を想起させるという。今後さらにこのような特徴点を詳細に追跡して銀山柵内や大森地区とは異なる当地区の様相を明らかにする必要があり、そうした作業を通じて港湾地区温泉津の地域的特性が視えてくるものと思われる。（田中義昭）

参考文献：小林俊二編『石見六郷社寺誌』2000年.

3	地蔵	高さ	15.0										Ⅶ類 印を結ぶ	
3	地蔵	現存高	12.8										Ⅵ類（b） 袈裟	
3	地蔵	現存高	14.1										Ⅵ類（a） 袈裟	
3	地蔵	現存高	12.5										Ⅴ類（d） 持物・念珠	
3	地蔵	高さ	15.8										Ⅴ類（a） 持物・念珠	
3	地蔵	高さ	16.7										Ⅳ類 持物・蓮	
3	地蔵	高さ	16.0										Ⅳ類 持物・蓮	
3	地蔵	高さ	15.9										Ⅲ類 念珠片手持	
3	地蔵	現存高	13.7										Ⅲ類 念珠片手持	
3	地蔵	高さ	14.2										Ⅱ類 合掌	
3	地蔵	高さ	15.6									釈妙□□□信女（刻書）	Ⅱ類 合掌	
3	地蔵	高さ	17.0										Ⅰ類 念珠両手持	
3	地蔵	高さ	16.2										Ⅰ類 念珠両手持	
3	平頂方形型墓標	塔身 / 基礎1 / 基礎2	54 / 19 / 19	幅	24							○○蕉巌之碑 （正面）世話人 ○○善二郎 ○○政太郎 ○○亀之助 （左側面） ○○為市 ○○熊市 ○○兼吉 □□□作 □□□造 （右側面） □○八造 ○友造 ○○長八 ○○吉雄	

3	地蔵	高さ	14.8										
3	地蔵	現存高	23.6										
3	地蔵	高さ	12.7										
3	地蔵	高さ	13.5										
3	座地蔵	高さ	14.0										その他 宝珠座像
M－1	組合せ宝篋印塔	笠～相輪	92										組み合わせは不確実
M－2	組合せ宝篋印塔	笠～相輪	104		1603							慶長十八［ 為尊譽］	組み合わせは不確実
M－3	組合せ宝篋印塔	笠～相輪	103										組み合わせは不確実
M－4	光背型墓標		162	最大幅	48	慶長［　］					覚翁□（孟）［ 慶長□年□月十五日 宗岩［ 南無阿弥陀佛 ［　］ □（慈）□□造立		
M－5	光背型墓標	現存高	130	最大幅	40						遠祖松浦平兵［ 之姉穏譽［ 譽妙［		風化の為、銘文不明
M	組合せ宝篋印塔	塔身	24	最大幅	26								M-1～M-3の組合せ宝篋印塔の塔身
M	組合せ宝篋印塔	塔身	24	最大幅	27								
M	組合せ宝篋印塔	塔身	26	最大幅	26								

2－24	2－23	2－22	2－21	2－20	2－19	2－18	2－17	2－16	2－15	2－14	2－13
無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
塔身	塔身	塔身	塔身	塔身	塔身	塔身 基礎 基礎 基礎	塔身 基礎	相輪 ～ 基礎	笠 ～ 基礎	笠 ～ 基礎	現存高
50	57	56	54	97	91	52 27 15 12	48.5 27	61	60	61	49
上部径 下部径 枘径	上部径 下部径 枘径	上部径 下部径 枘径	上部径 下部径 枘径	最大幅 底部幅 枘径	最大幅 底部幅 枘径	塔身 基礎 基礎 基礎	塔身 基礎	笠 塔身 基礎	笠 塔身 基礎	笠 塔身 基礎	最大幅 枘径
21 16 8.5	21 15 8	24 12 7.5	26.5 13 7	44 24.5 16	38.5 25 16	29 30 45 58	22 32	32.5 15.5 28	29 18.5 26	31 16.5 27	18 10
							享保16年 1731				
										キリーク	
	□譽願故法子		西念寺十世 基誉上人 和尚 石塔施主 □世□誉上人			徳運社崇誉上人寛隆 尚 和 俊誉上人弟子	享保十六辛亥年 弘音院住縁誉西欣 大 徳 十月初七日				
	頂部一部欠損	表面風化	1/4程度 欠損					風化が進む	塔身には四方に梵字。組み合わせは不確実。		頂部欠損

3	3	2－32	2－31	2－30	2－29	2－28	2－27	2－26	2－25
円頂方形型墓標	光背型墓標	台座	台座	地蔵	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔
塔身	高さ	現存高	高さ	高さ 仏高	塔身	現存高	現存高	塔身	塔身
48	128	13	33	29.5 18	59.5	27	43	46	51
幅	最大幅	最大幅	最大幅	幅 仏幅	上部径 下部径 枘径	下部径	最大幅	上部径 下部径 枘径	最大幅 底部幅 枘径
18	44	23	36	16 7	23 19	19	24	20(復元) 15 8	24 17 10
享保［　］	慶長15年 1610							明和4年 1767	
享保［　］○○○信女昊 三月廿九日 ○○屋喜平次 母	高月宗心　誉譽浄弘　□花禅林 ○○童女 慶長十五 松岩妙運　観譽妙善　□□□□ ○○童子 春朋□花 南無阿弥陀佛 ○○信士　心譽道善　□○信士 □○童女 ○○信女　法月妙□　妙□信女 ○○童女 三月十五日							□□四丁 □誉浄心比丘 十月十三日	
	側面には幅1.3cm程の工具痕が明瞭に残る			前面の一部が剥離	風化激しい現状で室篋印塔笠部に乗る	上部欠損32と同一固体の可能性	下部欠損31と同一固体の可能性	一部欠損	上部より1/3まで半分欠

西　念　寺

墓所石窟番号	1－1	1－2	1－3	1－4	1－5	1－6
種別	円頂方形型墓標	円頂方形型墓標	円頂方形型墓標	円頂方形型墓標	円頂方形型墓標	（線香立て）
高さ（cm）	墓石	墓石	墓石	墓石	墓石	高さ
	54	52	52	52	51	37.5
	台座 10	台座 14				
幅（cm）	墓石	墓石	墓石	墓石	墓石	幅
	23	23	23	23	23	30.5
	29	33				
	台座	台座				
紀年銘	大正７年（１９１８）	明治元年（１８６８）	天保９年（１８３９）	元治２年（１８６５）	明治３３年（１９００）	
梵字						
銘文	（右面）大正七年七月二十日 （正面）〇〇〇〇信士 （左面）俗名〇〇●年四十六才 〇〇榮太郎兄	（右面）明治元辰　俗名多七 六十一才 （正面）〇〇〇〇信士　信七父 八月十九日 〇〇〇〇信女 （左面）多七妻 ヲモヨ	（右面）歓文政八酉八月廿八日 ヲ十郎 法天保九戌三月十七日 ヲカシ□ （正面）〇〇〇〇信士 キリーク 〇〇〇〇信女 （左面）〇〇屋 ヲ七両親	（右面）元治二丑十月廿日 （正面）〇〇〇〇信士 政太郎父 （左面）俗名多平 三十七才	（右面）〇〇信七 （正面）〇〇〇〇信士 〇〇〇〇信女 （左面）〇〇信七妻トメ 周吉母 明治廿三子十二月 廿九日	
摘要			台座は崩壊 寸前のため 実測未実施	台座は崩壊 寸前のため 実測未実施	台座は崩壊 寸前のため 実測未実施	下部の一部欠損

墓所石窟番号	2－1	2－2	2－3	2－4	2－5	2－6	2－7	2－8	2－9	2－10	2－11	2－12
種別	一石五輪塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
高さ（cm）	空輪～地輪	現存高	相輪～基礎	相輪～基礎	相輪～基礎	現存高	現存高	現存高	現存高	現存高	現存高	現存高
	91	61	115	111	106	31	27.5	38.5	40	52.5	50	52.5
幅（cm）	空輪 18 風輪 14 火輪上 16 火輪下 20 水輪 20 地輪 22	笠 23 塔身 14 基礎 18	笠 32 塔身 18 基礎 28	笠 30 塔身 18 基礎 28	笠 32 塔身 16 基礎 28	最大幅 16		最大幅 19 枘径 12	最大幅 15 枘径 9.5	相輪 18	最大幅 17 枘径 9.5	最大幅 19 枘径 13
紀年銘												
梵字			阿弥陀三尊	阿弥陀三尊								
銘文			○○□○信士	○○○□信女								
摘要	空輪頂部一部欠損。地輪の風化が著しい。	相輪部破損塔身正面に月輪	組み合わせは不確実	組み合わせは不確実	組み合わせは不確実	上部・下部とも欠損	2－6と同一個体の可能性	上部欠損	頂部欠損	組み合わせて置かれていたが、別の固体と判断される。	頂部欠損	2個接合（2－26、2－27）

凡　　例

・西念寺に存在する石造物のうち、平成18年度に調査を実施したものを掲載した。

・規模は全高および最大幅をセンチメートル単位で記載し、欠損している場合は残存している規模を（　）内に記載した。

・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不能の部分及び文字の存在が推定される部分は▭で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は、](上欠)、[(下欠)と示した。また、推定できる文字は□内に入れた。

・戒名及び名字の部分は○○○とした。

・掲載していない石造物についても台帳は保管し、今後の研究の資料とした。

・写真図版の個別番号は一覧表の番号に対応する。

・挿図の個別番号は一覧表の図版番号に対応する。

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ
書　　名	石見銀山遺跡石造物調査報告書７
副　書　名	温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査
巻　　次	７
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
シリーズ番号	７
編執筆者	田中義昭・池上　悟・長嶺康典・中田健一・新川　隆・田原淳史
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会
所　在　地	〒690-8502　島根県松江市殿町１番地　TEL 0852-22-5649 〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL 0854-82-1600
発行機関	島根県教育委員会
発行年月	2007年３月
調査原因	石見銀山遺跡総合調査

所収遺跡名	所　在　地	北　緯	東　経	調査年月日	調査面積
西念寺	大田市温泉津町			060614 ～ 061102	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	石　造　物	特記事項
西念寺	寺院	戦国～昭和	墓地 墓地跡	一石五輪塔 一石宝篋印塔 組合せ宝篋印塔 無縫塔 円頂方形型墓標 線香立て 平頂方形型墓標 地蔵	

石 見 銀 山

ー温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)ー

平成19(2007)年3月

編　集　島根県教育委員会・大田市教育委員会
松江市殿町1番地　大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL　http://www.pref.shimane.jp/section/iwami/gin.home/
URL　http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/
URL　http://www2.pref.shimane.jp/ginzan/

印　刷　有限会社 伊藤印刷